
彼は優しいご主人様

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は優しいご主人様

【Nコード】

N6678U

【作者名】

Rail

【あらすじ】

ぶくぶくと太り、潰れたカエルのようにおぞましいほど醜い地方領主グレン・グレゴリー。彼はとある目的のために数多くの奴隷を買い集めていた。

そして今日もまた、美しいエルフの少女が彼の屋敷へと買われて来たのだった――

現代で死んだ男が転生して、奴隷を買い集めて現代知識を生かしつつ成功する過程とその後の話。

＊当作品にはエロ要素やハーレム要素はございません。ラッキー
スケベすらございません。全年齢対象です。そういったものを期待
されて読むと大変がっかりなるのでご注意ください。

＊「クク・・・今日から俺が新しいご主人様だ！」の記事<http://2chcomic.com/archives/51761911.html>から閃いた作品。

A面 エルフの少女、ティエラ

ある屋敷の一室、部下が連れてきた見目麗しいエルフの女奴隷をみて、グレンは相好を崩した。脂肪でたるんだ顔がぐにやりとゆがむ。

奴隷は年の頃なら十代半ば。まだまだ子どもだ。

着ている服はほとんどぼろ布と変わらず、奴隷の印である鉄の首輪がやけに存在を主張している。

「今回はずいぶんとかわいらしいのを連れてきたな？」

ぶくぶくに太った指でグレンはできものだらけの顎をなでた。

「はい。つい最近北の方から入荷されてきたそうです」

グレンの腹心の部下であるエルフのアルバートは恭しく答えた。同じエルフであるにも関わらず人間に仕え、なおかつ奴隷である自分を買ったアルバートに、エルフの少女は憎しみのこもった目を向けた。

「名前は？」

「ティエラと」

「気が強そうだ」

「見所があるかと思ひまして」

アルバートは涼しい顔で答えた。グレンは全身の肉をふるわせて笑った。

「お前の鑑定眼は信頼している。あとはいつも通りに」

「かしこまりました」

美しい辞儀をするアルバートに手を振ると、グレンは重厚なカーペットをぐしゃぐしゃと踏みつぶしながら部屋から出ていった。

「さて……」

アルバートがティエラに向き合う。ティエラは警戒して身を堅くした。アルバートはため息をつく。

「その格好で今のようにご主人様の目の前に出てもらっちゃ困る。まずはその汚いなりをなんとかしてもらおうか。たっぷり着飾ってお前を歓迎する宴に出てもらおう」

アルバートに呼ばれてやってきた女性の使用人によって風呂場に連れて行かれながら、ティエラは先ほど見た太った蛙のように醜い自分の新しい主人を思い出す。そしてこれから自分の身に降り懸かるであろう災厄にティエラは涙を浮かべずにはいられなかった。

そして一時間後。

鉄の首輪の代わりに白いリボンを巻かれ、小綺麗な白いドレスで着飾られたティエラは、大広間のラグの上に座っていた。

「ようこそティエラ、グレゴリー邸へ！」

幾人もの声が重なり、魔法のクラッカーがにぎやかに音を鳴らす。蓄音機からは美しい調べが流れていた。部屋にいくつも置かれた口

ーテーブルの上には豪華なご馳走が並んでいる。至るところに花が飾られ、なぜか色紙でできたわっかの飾りらしきものや謎の模様が書かれた旗が連なったものなどが天井や壁を這う。

ティエラの歓迎の宴、すなわち新人歓迎会が盛大に開かれたのであった。

彼女の周りには二十代から四十代に至るまでの男女が集まっていた。この邸の使用人たちだ。

ポカンとしているティエラの様子を、使用人たちは笑った。

「歓迎するよ、ティエラ」

「そんなに緊張しないで。誰もあなたをとって食ったりしないわ」

「僕はテッド。よろしくね！」

「俺はマーカス！ 初めましてティエラ！」

次々とかけられる暖かな言葉に、ティエラは眼を白黒させた。

ティエラは間違いなく奴隷だった。村が賊に襲われ、両親は反抗して殺され、ティエラは捕らえられて奴隷商人に売られた。嫌な気配のする鉄の首輪もつけられた。

奴隷に人権はない。この先ぼろ雑巾のようになるまでこき使われるか、死にたくなるくらいの恥辱を味わうのだろうとばかり思っていた。

それがなぜだかわからないが、現在ティエラの首から首輪は取り外され、代わりに柔らかなで高級そうな白いリボンがつけられていた。それに合わせてか、彼女に着せられたドレスも白く、上質で上品だ。いつまで立っても固まっているティエラに、周囲からは暖かい視線が向けられていた。

「アルバートってばまた新人に教えなかったんでしよう！ 性格悪いわ！」

肌の黒いエルフ——海エルフと呼ばれる——の少女がぷりぷりと頬を膨らませる。

彼らと同じくティエラの歓迎の宴に参加していたアルバートは眉を上げた。

「教えたところで信じないんだから、労力の無駄だと思わないか？
百聞は一見にしかずだ」

「そんな難しいこと言われてもわかんない！」

「勉強をさぼって遊んでばかりいるからだ」

「ヘーんだ！ アルバートの石頭！」

「知恵の数より毛が多い奴に言われてもね」

「まあまあ二人とも、主役がいるのに喧嘩なんて今日くらいは止めてよ」

全身がうっすらと白い毛に覆われた獣人の女性が仲裁に入る。

ティエラはその様子をただただ呆然として見ていた。

と、そこへドワーフの男がやってきて、ティエラの隣にどつかりと腰を下ろした。

「新入り、あっけにとられてるな。気持ち分かるよ、俺も最初はそうだった。まあ飲めよ」

そう言っでドワーフの男がティエラの杯に並々とワインを注いだ。

「ね、どこから来たの！？ 好きな食べ物何！？ 趣味は！？」

眼をきらきらさせながら小さな妖精がティエラの周りを飛び回る。

「みんな、落ち着いて！ ティエラもおなかも空いてるんじゃない？
食事を始めましょう」

人間の若い女性が手をたたいて言えば、方々から同意の声があった。

そうして、歓迎会が始まる。

戸惑うティエラに、邸の使用人たちは優しく接してくれた。

頬の落ちそうなほどおいしい食事をほおぼりながら、これは夢じゃないのかとティエラは自身の膝をつねったが、幸い夢ではないようだ。

ティエラは使用人たちから一人一人丁寧な自己紹介を受け、挨拶を交わした。

と、ノックの後に大きな扉が開いた。入ってきたのは先ほど見たティエラの新しい主人グレンだ。

ティエラはぎくりと身をこわばらせた。先ほどとは印象が多少変わったとはいえ、おぞましいほどの醜さだ。

「急な仕事が入ってな。遅れた」

「まだ始まったばかりですわ」

獣人の女性が笑う。

次々と使用人たちから声をかけられるのにグレンは鷹揚にうなずくと、使用人たちと同じく床の上に座った。

「私のことは気にせず、続けなさい」

そういつてグレンがグラスを持つと、アルバートが素早くその中にワインを注いだ。

使用人たちはグレンの言葉通り、めいめいに食事を再会した。主役であるティエラの周囲には再び使用人たちが集まる。

「アルバートから聞いたかもしれないけど、あの方が私たちの主人のグレン様よ」

獣人の女がにこやかに言う。

「顔は滅法凶悪だが、気は優しくて力持ちだから心配するな、新人」

ドワーフの男がティエラの肩をたたいた。

とはいえ、ティエラは不信が拭いきれなかった。

所詮奴隷を買うような男だ。いつ夜伽を強制されるかもわからない。邸の人間だって、新人を陥れる為に演技をしていないとも限らない。

あんな醜くてぶくぶくに太った人間、性根だって腐っているに違いない。

エルフの間には奴隷を使うという慣習は存在しない。そのためティエラの抱いた嫌悪感も強かった。

宴の途中でグレンは仕事があるからと抜けたが、彼の通った場所に悪臭が漂っているような錯覚を覚え、ティエラは眉をしかめた。

「ティエラ、言いたかないけど、人を見た目で判断するのはバカだよ」

海エルフのエイダが苦々しげに言う。

元々森エルフと海エルフは種族的に仲が悪いということもあり、森エルフであるティエラは苛つきながらエイダを睨んだ。エイダも

ティエラの態度に顔をしかめ、舌を出した。

「森エルフ様はみんな嫌味で性格が悪くて頭が固い連中ばかり！」

そう言うのとすつくと立ち上がり、そのままティエラから離れていつてしまった。

エイダの失礼な発言に憤然としたティエラだったが、人間の女性であるエイミーにたしなめられたので我慢した。

「あなたの気持ちも分かるのよ。でも、もっと素直な気持ちでここでの出来事を受け止めてほしいの」

そう笑うエイミーにすら警戒心を抱いたティエラだった。

それほどに、ティエラの奴隷生活は心を凍らせるに十分だったのだ。

その後、緊張のせいでワインの酔いが予想外に回ったティエラは、早々に潰れてしまった。

アルバートによって使用人室のベッドに寝かされた彼女は、疲れも出たのかそのまま翌日までぐっすりと眠ることとなった。まるで夢のような一日だったと思いながら。

B面 グレンの野望

現在三十代半ばのグレン・グレゴリーは、齢十六の時に唐突に前世の記憶を思い出した。

彼の前世は日本人であり、とある小さな会社の課長であった。

死因はいわゆる過労死。関連企業に役職は昇進して出向したのはいいものの、朝七時には会社に出勤し日付が変わるまで帰れない、そんな激務の日々が続いた結果の過労死だった。

そして彼が生まれ変わった先は、人間以外の種族も当然として存在し、なおかつ魔法という自然科学では解き明かせないような不思議な力が存在する世界だった。

彼の肩書きを説明するなら、そこそこ田舎の領主。彼が二十代半ばのころに先代領主であるグレンの父が引退して引継が終わったため、今はグレンが新しい領主である。

父の仕事の補佐をしていた時もそうだったが、いよいよ領主に就任した彼は思った。

領主というのは、国という巨大な企業から地域の運営を任された管理者であり、それすなわちエリアマネージャーである、と。

さらに言うなら領内の運営はかなりの裁量が領主に任されているため、実質彼はこの領地の取締役、すなわち社長であるとも言える。彼はときめいた。

前世では平社員から苦勞して管理職になったというのに残業手当がつかない状態で平社員の時よりもさらに激務を課せられ、さらに権限は激しく制限されていた。商学部で学んだ知識をちっとも活かせずに悔しい思いをしていた。

それが今や領主という役職を得たことで激変したのだ。

他の領主から見れば田舎のそれほど良くもない領地だろう。国から興味も払われていない。しかし彼からすると一国一城の主になったようなもの。

税の徴収は財務や経理の仕事。公共工事は施設管理。働かせる役人については人事。収益を上げようとすることは営業や企画と言えよう。

そう。前世ではさえない課長だった彼は、異世界で社長となったのだ。

異世界では魔法が使えるせいかどうかわからないが、工業の発達が大変遅れていた。情報網も発達していない。工場ではなく工房で職人が頑張るのが主流だった。

そして彼は思ったのだ。

商学部で学んだものの、日々成長していく現代日本ではすでに使えなくなった理論。それを今こそ使うべきではないかと。

「テイラーの科学的管理法って、通じるかな？」

彼の表情は玩具を目の前にした子供のようにであった。

とまあ、それだけならば彼の人生は勝ち組だと言えただろう。領主は基本的に世襲制。グレゴリー家の後継ぎは彼だけで、他に兄弟はいない。

が、彼には致命的な欠点があった。

容姿がひどく醜かったのだ。

顔の作りというレベルではない。何を食べても太り、水を飲むだ

けでも太る異常な体質で、以前に断食したときには少しもやせなかったくせに地味に死にかけた。

仕方がないので現状維持につとめているが、容姿だけでも初対面の人間には生理的に嫌われる。邪悪で醜悪に見えるらしい。

彼の父は多少顔の造形が悪いというところがあった。母は太りやすい体質だった。グレンは両親の悪いところを受け継いだのである。あるいは母親が彼を妊娠中に何か神様やら妖精やらに悪いことをした天罰かもしれない。

とにかく、グレンにはどうしようもないことなのである。

そしてそれは周囲にも言えることであつた。

学都と呼ばれる場所へ留学へ行く前、グレンはあまりよろしい後継ぎではなかった。これが将来領主になるのかと思うと暗澹たる思いを皆抱いていた。

しかし留学から帰って来たグレンは顔つきも言動もすっかり変わり、いかにもやる気のある、未来を担うにふさわしい心持に代わっていた。中身がほとんど変わっているに近いのだ。当然である。

が、なにぶん醜い。視界に入るだけでもおぞましい。気分が悪くなる。

生理的嫌悪程やっかいなものはない。皆グレンの性格が悪くないことは知っていたのだが、一人が屋敷を辞するとそれにつられるように次々と辞めていった。特に女性はひどかった。女性自身が厭うこともある。手箒にされると危惧したらしい。辞めていった女性達も同様である。なまじ上流階級の女性が多かったため、婚姻に支障が出ると困ると思われたということもある。

機械があろうとそれを操る者が必要である。機械すらない世界では、機械の何十倍もの手間がかかる手作業で仕事をしなければならぬ。従って、日本にいたときよりも予想以上に人手が要った。第一次産業に限らず、第二次産業、第三次産業もしかり。そんな状態での人手不足は致命的だった。

頭を抱えたグレンは、ある時出先で奇妙なものを見た。鞭を持った男が何人もの男女を鎖につないで引きつれているのである。

「あれはなんだ？」

「奴隷商人でございましょう」

長年グレゴリー家に仕えている執事が答えた。

奴隷と聞いて彼は留学中に学んだ知識を思い出した。

労働力としての人手が必要となるこの世界では、数多くの奴隷が存在した。

家事、農業、工芸、夜伽、他もろもろ。様々な用途がある。比較的知識や技術を持った奴隷は値段が高い。また、顔が美しいものも値段が高い。亜人も高価だ。よほど使い道のない奴隷でなければ転売も可能だ。奴隷は人ではなく財産扱いなのである。

財産の管理は個人の裁量に任されている。大事にするも使い捨てるも自由だ。

地球の奴隷との違いとして最たるものが制御装置の存在だろう。重々しい鉄の首輪で、決して主人の許可なしでは外れない。無理に外そうとすると魔法の効果で奴隷に苦痛が与えられる。それだけではない。制御装置は主人の命令一つで奴隷に苦痛を与えることができるし、発信器のような居場所を特定する機能も付いている。主

人が許可した以上の距離を離れると、これまた奴隷が苦しむという塩梅だ。

この恐ろしい首輪のせいで、人攫いの被害者であろうと自ら身売りした人間であろうと、奴隷を買った主人には逆らえないし逃げられないというわけだ。主人が自らの意思で奴隷を解放して制御装置を外した場合は別であるが。

これらの首輪はすべて国の管理下で作られ、流通する。奴隷商たちは国から首輪を買い、奴隷を仕入れ、顧客に売って収益を上げるというわけだ。要するに、奴隷は国家公認の商品なのである。

習った知識を一通りおさらいした彼は考えた。

つまり、奴隷を買えば一生その奴隷を使うことができるわけだ。転売も可能というのなら、つまり奴隷というのは固定資産の一種なのだろう。しかも運用しだいによっては資産価値を増やすことも可能と言うわけだ。

さらに言うなら、奴隷が主人に逆らえず、余所へ行くこともできない。ならば、散々技術を仕込んだ場合でも余所に引き抜かれるという事態には陥らないということだ。

奴隷を使う上では給金を出す必要はないが、食費や生活費などはこちらで準備しなければならない。が、そんなもの、住み込みが当然のこの世界では普通の使用人を雇ったところで同じである。むしろ給料と二重払いになっているのがなくなる分、やりやすいくらいだ。

奴隷を買うとなっては初期費用は高いが、長く使えば減価償却もできるのではないだろうか。耐用年数は馬鹿長い。

また、通常の退職金は雇用している期間に積み立てておく後払いの給料であるが、奴隷の購入費用は給料の先払いと考えればちゃんと

んではなかろうか。

そして彼はグレンは閃いた。

つまり、奴隷をかうってことは、終身雇用することであると。

A面 歓迎会の翌朝

歓迎会の翌朝、ひどい二日酔いのティエラを眠りから覚ましたのはエイダの不機嫌そうな声だった。

「いい御身分ね！ 初日から酔いつぶれて二日目には寝坊？ もうお日様だってすっかり昇ってるんだからさっさと起きなさいよ！」

甲高い声が頭に響き、痛む頭を押さえながらティエラはノロノロと体を起した。

「もう朝……？」

「そうよ！ 朝食の時間に遅れちゃうわ。早く起きて準備なさいっ」

一気に言い切ると、エイダは真新しい服を一式ティエラのベッドの上に投げ出した。ご丁寧にも下着まで準備してある。ベッドのわきには真新しい靴も用意してあった。

寝起きで頭が回らないティエラは、二度ほど瞬きをしてその服を見つめた。

「お仕着せ！ うちの制服よ。まさかそのドレスで仕事する気じゃないでしょ？」

反応の鈍いティエラにいらついているのか、エイダは腰に拳を当ててふくれっ面で言った。

昨日のエイダは年相応の可愛らしいチュニックを着ていたが、今日はシンプルな紺色のドレスを着ていた。ティエラに渡されたものと同じものである。肩にかかる程度のパーマっ毛の強い赤茶けた短い髪をポニーテールにして白のリボンでまとめている。

「いい？　この水瓶と洗面器は使っていいわ。タオルも置いてあるから。そのリボンは首につけたままにしときなさい。十分で支度して」

チェストの上を指差したエイダはつつけんどんな態度で言う。

「え、うん……」

「早く！　あと九分！」

「分かったわよ！」

大きな声でせつつかれて、ティエラは眉をしかめた。これだからガサツな海エルフは嫌いなのだ。

結局十三分かかってティエラは準備を完了させた。

「——うん、服はちゃんと着れてるみたいね」

ティエラの身だしなみをチェックしたエイダは満足げに頷いた。

「当り前でしょう。人を何だと思ってるの」

その態度に腹を立てたティエラが少々恨みがましく言うと、エイダはあっけらかんと言った。

「買われたての奴隷でしょ。まだ雇用契約結んでないんだし」

唐突に奴隷という現実を突き付けられたため、ティエラは思わず衝撃を受けて固まった。後半の言葉を聞き逃すほどに。

「さ、ご飯食べに行くよ。ぐずぐずしてたら朝礼に遅れちゃう」

動き出さないティエラの腕をエイダがとった。そしてそのまま引きずるように部屋を出る。

体調不良と相まって顔面蒼白になっているティエラを見て、廊下の端から獣人の女性クレアがすっ飛んできた。彼女もまた、紺のドレスを着ていた。

「あら大変、顔色真っ青じゃない。やっぱり昨日ブルーノが飲ませ過ぎたんだわ。今すぐ治してあげるからね」

言いながらクレアはティエラの目の前に手をかざした。短い詠唱の後にその手が淡く光り、ティエラの体調の悪さが和らぐのが分かった。治癒魔法だ。

「エイダ、入ってきたばかりの子は気をつかってあげなさいって言ったでしょう？」

「単なる二日酔いじゃん。心配しすぎだよ」

「二日酔いで新人研修を受けさせたら能率が悪いでしょ。二度手間になった分はあなたにしわ寄せが来るのよ」

「はい」

お母さん然とした調子でお小言を言うクレアに、エイダも少々落ち込んだ様子で返事をした。

「まあそう叱ってやるなや、クレア。新入りも腹を空かせてる。早く飯を食わせてやれ」

「元はと言えばあなたが無理やり飲ませたからでしょう、ブルーノ！」

近くを通りかかってかつかと笑うドワーフをクレアが睨んだ。ブルーノは怖い怖いと肩をすくめてそのまま階段を下りていった。クレアはため息をつく。

「とにかく、朝ごはんにしましょう。朝礼に遅れちゃうわ」

とりあえずその言葉に頷きながら、内心でティエラは首を傾げた。先ほどから彼女たちの言っている朝礼とはなんだろう？ と。

ティエラはそのままエイダとクレアの二人に連れられ、一階の食堂へとやってきた。

広めの食堂では、既に結構の数の使用人が朝食を食べ始めていた。ティエラがきよろきよろと食堂を見渡してみると、ウェイターは思わず、自分たちでカウンターまで行って料理を貰ってくる仕組みらしい。

エイダたちと同じように四角いトレイを持って列に並んだティエラは、食堂のコックらしき男たちに声をかけられながら皿を受け取った。トレイの上に載せられたのは主食の焼きたてのライ麦パンとソラマメのスープ、そしてスパイスの香りが漂うキャベツと鶏肉の炒め物だ。少量だが、新鮮なミルクももらえた。いずれにせよ、奴隷商の所にいたときの食事とは雲泥の差だった。

「ご飯は一日三回、決まった時間に食堂で食べるようになってるの。昼食に限って朝か前日に言っとけばお弁当も作ってもらえるのよ。来るのが遅いと料理がなくなっちゃうときがあるから気をつけて」

と、クレアが説明する。エイダは配ぜんの係に頼んで大盛りにしてもらった料理を勢いよく食べていたため無言である。海エルフは森エルフに比べると体力があり、食欲も旺盛なのである。まるまると太ったソラマメも、あっという間に噛み砕かれてエイダの腹の中

へと納まっていくな。

「あそこに時計があるでしょう？ あれが八時になったら朝礼が始まるから、それまでに広間に行くようにしてね。あとエイダとはこれから同室になるけど、彼女が寝坊するようなら叩き起こして」

「ひふれいな！ わはひはねぼうしない！」

「今日はね」

クレアが苦笑して言う。

ティエラは何とも言えない気分になっていた。

彼女の奴隷としての区分はオールラウンド。つまりなんでも可。といっても、こと森エルフの奴隷というのは見た目が良いものが多いので、大抵は金持ちの変態に買われることが多いと散々聞かされていた。が、昨日からの様子を見るに、まるで地方から出稼ぎにきたような扱いではないか。

奴隷商が聞きもしないのにべらべらとしゃべったせいで、ティエラは自分がいかに高価な値が付いているか知っていた。替えの利く使用人とは違う。

わからないことほど怖いことはない。

先の見えない不安がティエラを苛んだ。

B面 奴隷購入

思い立ったが吉日、グレンは自身の思いつきにご満悦になりつつ、執事を連れて奴隷を買いに出かけた。

奴隷商には何種類がある。まず大雑把に分けるとすると合法と違法。奴隷商人をするには国の許可が必要だが、まあある意味飾りのようなものだ。よほど悪質でなければ偽造された許可証を持っていたてもお目こぼしされてしまう。逆に言えば、ちゃんとした許可証を持っている奴隷商は国のお墨付き、安心できる奴隷商ということになる。

さらに細分するなら、奴隷の用途ごとに特化した奴隷商がある。一番多いのはやはり農業用奴隷で、二番目は家事などの家庭内での仕事をする奴隷だ。三番目に多いのは鉱山などでの重労働をする奴隷だが、これは現地に奴隷商が直接赴くため、見る機会は少ない。そして四番目、一つの奴隷商が扱う数こそ少ないものの、各地で売られている人気商品、それが性的な用途の奴隷である。

当然ながらグレンの目的は家庭内労働用の奴隷であったのだが。

「いかがですか、領主様。よいものを取りそろえております」

小太りの奴隷商の男が揉み手をしながらグレンに愛想を振りまく。広々としたテントの中には十ほどの檻があり、中には見目のよい奴隷が閉じ込められていた。グレンは知らなかったが、全て性的な用途の奴隷であった。グレンの見た目から、奴隷商の人間が勝手にそうと判断したためである。

「ふむ。なるべくなら読み書きができるのがいいんだが。それと仕事を熱心にするのがいい」

社員教育するにあたって、流石に読み書きから始めていては面倒だ。なるべく頭がよくて、学のあるものが欲しかった。そして勤務態度が真面目な人柄が望ましい。

が、グレンの言葉は見事に誤解された。

「でしたらこちらはいかがでしょう？　見事な歌声と舌技を持っております」

と、奴隷商の男は二十代前半の女を示す。艶っぽい体つきの女は、どこか壊れているのか目がうつろである。グレンの視線に気づいた女は、怯えるように視線をそらした。全身で嫌だと訴えている。

何とはなしに話に通じていないと悟ったグレンは言い方を変えることにした。

「頭がよいのがいい。よく気がついて心配りができるのはいいか」「でしたらこちらはいかがでしょう。元は南方の貴族のところにした奴隷ですが、話題豊富で夜の方を盛り上げるのも上手で――」

「もういい」

グレンはため息をついて遮った。何故か話を通じないと悟ったのだ。グレンがテントの中に目を走らせた。グレンの視線に気づいた奴隷も人間も、一様に畏怖と嫌悪を抱いて視線をそらす。グレンは自身の容姿を恨んだ。

と、

「――誇り高きものは自己を高めよ。自己研鑽は他者に捧ぐものである」

聞き覚えのある言葉にグレンは声の方に首を巡らせた。

声の主は檻の中にいた。エルフの青年だった。グレンの方を挑むように見ている。

「ほう」

グレンは彼の方へと近づいて行った。

「スキエンティア学院の校訓を知っているとは。関係者か？」

「卒業生です」

青年は淡々と答える。青年の言葉にグレンは目を丸くした。スキエンティア学院というのは国でも一二を争うハイレベルの学び舎である。グレンが留学していた学校の近所ではあったが、スキエンティア学院グレンの学校では月とスッポンである。

「専攻は？」

「政治学全般を」

「卒業論文は」

「地方領地における人口流出問題と労働力確保について」

「おい、こいつはいくらだ」

グレンは振り返って尋ねる。

「は、はい」

奴隷商は一瞬まごついたが、すぐに脳内での計算を始めた。

「二千シリルになります」

庶民ならば三年は軽く遊んで暮らせる金額である。

「高い。負けろ」

「ですがなにぶん、教養のある奴隷ですので……元値も張っていますし」

にやにやと崩れた愛想笑いを浮かべながら奴隷商が言う。
が、

「私は百シリルで売られました」

奴隷の青年が冷たい声で言う。

「元値の二十倍か」

グレンも冷たい声で奴隷商を睨む。奴隷商は一瞬震えあがったが、すぐに商売用の顔に切り替えた。

「我々も商売ですし、奴隷の維持にもお金がかかりますので」

「私を買われたのは一週間前です」

さらに奴隷の青年が追撃する。

グレンは再び奴隷の青年を見る。一週間と言う割には顔色が悪く、生傷も多い。前方へと投げ出された足に包帯が巻かれている。

「足に怪我をしているようだが」

「この男にやられました」

青年は淡々と答える。

グレンは再び奴隷商へと視線をやった。

「三百シリルだな」

「そんな殺生な！　せめて千シリルで」

「許可証は偽造です」

「ほう。ならしよっ引いて全員押収するか」

青年とグレンの追撃に、奴隷商は肩を落とした。

「……五百シリル」

「三百五十シリル」

「四百シリル」

「ならそれで手を打とう」

グレンは悪びれた様子もなく鷹揚に頷いた。

支払いを現金で済ませると、グレンは奴隷商の肩を叩いた。

「なに、こいつの具合が良ければまた買いに来てやるさ」

「……ありがとうございます」

商売人としての矜持でなんとか笑顔を作った奴隷商だったが、正直な話、二度と来てほしくないと痛切に思ったのだった。

グレンが最初買った奴隷はアルバートと言った。友人に騙されて二束三文で奴隷商に売り飛ばされたのだという。

アルバートを屋敷へ連れて帰ったグレンは、最年長の家令にアルバートを引き合わせた。

「一年でこいつを一人前の家令となるように仕込め」

「は……？ この奴隷を、ですか？」

家令は信じられないといった顔で聞き返した。

「ああ。一年後、こいつが使えるようになったならお前がこの屋敷を辞すると言っても引き留めない。退職金も弾もう」

グレンがなるべく感情を込めずに言うと、家令も感情を表に出さずに深々と頭を下げて承諾したのだった。

そしてその一年後、老人の家令は多額の退職金と共に嬉々として実家へと帰り、アルバートがグレゴリー家の家令となったのだった。

A面 グレゴリー邸の使用人

グレゴリー邸の朝は朝礼から始まる。

広間に屋敷中の使用人が集まり、連絡事項だの今日の予定だのを確認するのである。前に出て仕切りをするのは家令のアルバートだが、グレンも壁際に陣取って参加している。そもそもこの朝礼はグレンの発案である。実は終礼もしようとしていたのだが、勤務形態から考えると難しいと分かったためにそちらは廃案になった。

「――伝達事項は以上。最後に、昨日の歓迎会に出席した人も多いから知っているだろうが、今日から一緒に働く新しい仲間、ティエラだ。ティエラ、改めて自己紹介を」

「え？」

唐突な話に驚きつつも、エイダに背中を押されてティエラは前へと出た。振り返ると種族や年齢、性別こそ違うが皆同じようなお仕着せを着た男女がずらりと並んでいる光景にぎくりとする。

「ティ、ティエラ・クリステイです」

緊張で体を硬くする少女を、三十人ほどの使用人たちが温かな目で見守る。その何とも言えない居心地の悪さに、ティエラは逃げ出したい気分になった。奴隷なので逃げられないのだが。

「彼女はハウスメイドになる予定だ。教育係はエイダ。最初は分からないことが多いだろうから、気をつけておいてくれ。本日の朝礼はこれで終わる。各自、仕事に就け」

簡潔な言葉と共に朝礼は終わり、使用人たちはそれぞれの仕事を始めるべく散っていった。

「まったく。なんで森エルフ様の教育係が私になっちゃったんだか」
エイダの開口一番の台詞に、ティエラは眉根を寄せた。

「ま、とりあえず今日の午前中は邸の中の案内するから。午後からはエイミーにお勉強教えて貰ってね」

「うん……」

数々の不満を抑え、ティエラは頷いた。

それから午前中は邸の中を順繰りに案内して貰った。

グレゴリー邸は地方領主の館というだけあって、役場のような機能も兼ねていた。一階の道にスペースが公のもので、そこ以外と二階と三階がグレゴリー家の領分だった。

公のスペースには何人か通いの役人が来て仕事をしていたが、ほとんどが見たことのある顔、つまりはこの屋敷の使用人たちだった。「グレン様はあまりお身体が丈夫じゃないから、基本的に屋敷内で仕事をする人が多いんだよ。以前はもっと離れた場所に役所があったんだけど、グレン様が様子を見に行くのが大変だからって何年前にこの屋敷の近所に移設して、中でもグレン様の指示が必要になる部署だけこの屋敷の中に移したの」

そうエイダは説明した。

「使用人の数はそれほど多くないから、立派なお貴族様の御屋敷とは違って一人でいろんな仕事をしなきゃいけないの。怠けものや無能な働き者はいらないから覚悟してね」

「覚悟……?」

ティエラが首を傾げると、エイダは少しか目を眇めた。

「もう一度奴隷商に売られる覚悟。使えない奴は差し戻しだからね」ティエラの顔が引きつった。さっと顔から血の気が引く。

「差し、戻し……?」

ティエラの顔色に気付いたのか、エイダは慌てて付け加えた。

「うん。ま、滅多にいないけどね。グレン様は雇えるうちは雇ってくださいるって言うてるし!」

滅多に、ということとは過去にはいたということか。

ティエラは慄然とした。奴隷商のところで受けた恥辱を思い出す。下卑た言葉、舐めまわすような視線、無遠慮な暴力、粗末な衣食住、そして完全なる商品扱い。もう二度と戻りたくはなかった。

「……なんでここでそんな反応するのかなあ」

安心させるはずが落ち込んでしまったティエラを見て、エイダは頭を抱えた。困り果てたようなエイダの声は、残念ながらティエラの耳に届くことはなかった。

午後、ティエラは図書室にいた。

図書室といってもスペースの三分の一程がカーテンで区切られ、机と椅子の置いてある自習スペースになっていた。採光用の大きな窓があり、壁には黒板が掛けてあった。図書室の残り三分の二に所狭しと本が並んでいる。

「それじゃこれから、仕事の流れや一年の流れ、この屋敷の決まりごとなんかを説明していくわね。エイダの説明もあっただろうから、二回目になったらごめんなさい」

髪に白いものが混ざりはじめたエイミーという女性がゆったりとした調子で説明を始めた。

「まずこれは全ての使用人に言えることなのだけど、朝昼晩には食堂で食事をするの。屋敷中に時計があるでしょう？ 基本的には朝は七時、昼は十二時、晩は五時からよ。朝礼は八時から基本的に全員参加。仕事は朝礼後から夕食の時間までなんだけど、ハウスメイドは交代で一時間だけ休憩していいことになってるの」

「は、はあ……」

「あなたは新人だから、基本的にエイダと同じ仕事をしてもらうわ。今日は例外だけど、明日からは食事の下ごしらえの準備と掃除とあと洗濯ね」

ティエラはただただ頷くしかできなかった。

「それから使用人のお休みは一週間に二日あるの」

「ふ、二日!？」 安息日だけじゃなくてですか!？」

信じられない話を聞いて、ティエラは声を上げた。

一般的に、安息日と言われる日曜日以外は仕事をするのが普通である。ましてや奴隷だ。休日など与えられるはずがないと思っていた。

ティエラの反応に、エミリーは悪戯っぽく笑った。

「そうよ。でもうちは『一日休養、一日教養』がモットーだから、大抵の人はどちらかの休みの日を勉強に充てているわね」

そう言うエイミーの表情に影は見あたらない。

「魔法の練習をする人もいれば、この図書室も解放されてるから読み書きの勉強をする人もいるわ。家事の技術を磨くための勉強会をする人たちもいるし、余所に習い事へ行く人もいるの。習い事もある程度までグレン様が費用を出して下さるのよ。あなたも何か勉強したいことがあれば言ってみたらいいわ」

その言葉にティエラは絶句した。

基本的に、自分の仕事以外の勉強できるというのは贅沢である。よほど頑張らなければ金にもならないからだ。考えて見てほしい。例えばお針子が古代文明について勉強したとして、それをどう仕事に活かせるというのか。料理人が馬術を習ったところで、料理が上手くなるわけではない。学んで賢くなったところで、出来る仕事の決まっている下層階級などでは仕事に活かせるとは限らない。それゆえに貴族や金持ちの人間でなければ仕事をしているのに勉強に丸々一日割くことなんてできないのである。

さらにエイミーの爆弾発言は続く。

「二か月目から月の初めにお給金をもらえて、三ヶ月目から他の使用人と一緒なら休日に出出することもできるようになるわ。半年務めあげたら一人で外出もできるようになるの」

ティエラの頭は爆発する寸前だった。

「奴隷、なんですよね、私」

自ら口にすることは屈辱ではあったが、思わず確認せずにはいられなかった。

エイミーはくすつと笑う。

「ええ。それから私やこの屋敷にいるみんなもね」

ティエラは彼女の言葉の意味をたっぷり十秒は考えた。

考えて考えた結果、

「ひどい冗談ですね」

「本当のことなのに」

エイミーは心外そうに言う。

「そりゃあ普通の奴隷ならもう少しき使われるでしょうけど、グレン様だもの。あの方は私達のことを大事にしてくださっているのよ」

心底うれしそうに言うエイミーに、ティエラは目を回しそうになったのだった。

エイミーの言葉が全て本当であるとティエラが知る日はそう遠くない。

B面 叶えたかった夢

グレンには夢があった。

彼は前世で労働者として酷使されていた。

長時間の拘束、サービス残業、休日出勤は当たり前。部下の失敗は彼の責任、上司の失敗は彼のせい。有給？ そんなものは申請を出した時点で蹴られて罵詈雑言を浴びせられるに決まっている。

日々の仕事に精いっぱい、たまの休日は終日たまっていた家事をするかぐったりしているかのどちらかだった。

前世の彼が社会人になる前には、夢があった。

同行の士が集まる社内サークル、和気あいあいとした慰安旅行、桜の下での花見、無礼講の忘年会、日々のコミュニケーションとなる飲み会、有給を使って連休を作ったの海外旅行、上下関係なしの社内運動会。

ほとんど仕事に関係ない辺りが若者らしかった彼だが、現実是非情であった。実現したことは何一つない。唯一実現したと言えば日々の飲み会であるが、基本的に仕事の延長である。接待もしかり。

彼が就職したのは社内の福利厚生がほとんどないに等しいブラック企業だった。

さらには上司も悪かった。パワハラ上司は無駄に口が達者で、自分のミスを下下に押し付けるのが上手かった。さらに気にいらぬ部下の人格攻撃をして自主退社に追い込むのが十八番だった。ご多分に洩れず、前世の彼も人格攻撃を食らったが、上司に阿ることでなんとか被害を回避した。それにしただって、精神的に辛いものがある。

った。

だから彼には夢があった。

自分が偉くなったら、部下には優しくしよう、と。

そして異世界での領主となった彼はさらに夢が広がった。

彼は社長である。社長であるからには部下がいる。たくさんいる。ならばそれは一種の組織である。組織であるならば決まりを作る必要がある。そして自分は従業員には気持ちよく働いてもらいたい。

そうだ、福利厚生を充実させよう。

グレンはそう思い立った。

社内サークル、慰安旅行、飲み会、有給、週休二日、資格取得や勉強の補助制度、出産休暇に育児休暇。医療補助も出したい。

調べてみたところ、この世界では社員の福利厚生という観念が薄いらしい。もちろん個別にはあるが、マニュアル化している場所は少ないようだ。そもそも会社という概念も薄い。

彼の脳内辞書に代償行為という言葉はない。僕の前に道はない、僕のうしろに道はできる、と奮起したグレンであったが問題があった。

使用人がグレンを嫌がって次々に辞めていってしまうのである。

いかにグレンが素晴らしいと思う福利厚生を充実させようとも、使う人間がいけないのでは意味がない。さらに言うならグレンの言葉

は他人にやたらと誤解されやすかったため、上手く説明もできなかった。そのため理解者はゼロ。

よって、彼の発案が現地の文化と融合しつつ実施されていくのは、彼の意を正確に汲み取ることに長けたアルバートが家令となった後になるのだった。

A面 エルフの奴隷とは

世の中には貧困を理由に自ら奴隷へと身を落とす人間が少なくないが、ことエルフにおいてはそれは滅多になかった。

不老長命のエルフは子供が出来にくく、生まれた子供はその村ぐるみで育てられる。若者は希望の芽だ。

はらわたの煮えくり返るような思いを味わって奴隷に成り下がったアルバート・マクレーンにとって、グレンとの出会い是不幸中の幸い、否、僥倖だったと言える。

アルバートは奴隷になる前は、前途有望な役人であった。

スキエンティア学院を優秀な成績で卒業した彼はあちこちからお声がかかったが、恩師のアドバイスによって国の政治に携わる機関へと勤めることにした。

実際、勤め始めた彼の評判は良いものだった。仕事熱心で真面目、知識が豊富で頭が切れる。

ただアルバートには不満があった。彼の勤めるところに限ったことではなかったが、貴族が幅を利かせていたのだ。上下の風通しが悪く、下の意見が通りづらい。

優秀な上に清廉潔白なアルバートは、そうでないものにとっては非常に邪魔な存在であった。

といっても、彼を嵌めたのは同僚でも上司でもない。
彼の幼馴染の男だった。

原因はアルバートの婚約者だった。いわゆる横恋慕というやつだ。その手の感情には鈍かったアルバートは、幼馴染が勝手に思いつめた拳句に自分を殺したい程憎んでいるとは全く気付いていなかった。久しぶりに幼馴染に呼び出され、杯を交わした時だった。ワインの中には睡眠薬が混入されていた。薬物に対する耐性の高いエルフの彼だったが、あまりにも強力なそれに、瞬く間に意識を失ってしまったのだった。

そして次に気付いた時、彼の首には重い鉄の鎖が嵌められていた。

目の前には心底うれしそうに笑う幼馴染と奴隷商。わざわざアルバートが意識を取り戻すのを待って始められた売買交渉で、エルフの奴隷としてはありえないほどの安さで彼は売られたのだった。性的な用途の奴隷として。

数日、その町にいた。職場の人間や郷里の仲間たちがアルバートの失踪に気付かないわけがなかったが、救助の手が差し伸べられることはなかった。

脱走は全て未遂に終わり、怪我が増えただけだった。

グレンを初めて見たとき、アルバートは思わず蔑んだ目で彼を見てしまった。

自分の奴隷としての用途は分かっている。醜い男が、金にあかして一時の快楽を求めに来たのかと思ったのだ。

見れば見るほど、不格好な男だった。いっそ抽象画のような面白

さがあるような気がしなくもない。あるいは悪魔の下僕を描いた宗教画か。

しかし、どうにもその目には理性の光が宿っているように見えた。そして彼と奴隷商の会話に耳を傾けたアルバートは違和感を感じたのだ。

男は言う。なるべくなら読み書きができるのがいい、仕事熱心なのがいい、と。

その時点でまずおかしかった。

そして男は奴隷商が進めた奴隷を見ると、頭痛でも堪えるような顔をしてさらに言った。頭がよくて、気配りができるのがいい、と。

まるで働き手を探しているような物言いだ。そもそも、男が檻の中を見渡す目は、性的なそれとは遠くかけ離れている。

アルバートの頭に、一つの推論が浮かんた。

そして彼はその可能性に懸けた。

「――誇り高きものは自己を高めよ。自己研鑽は他者に捧ぐものである」

彼の母校の校訓である。

もし仮に男の目的が自分の思っているものと違っていたら、興味は示さないだろうと思ったのだ。

果たして、その予想は当たっていた。

連れて帰られる道中は質問攻めだった。

何を勉強したのか、何が得意か、何ができるのか、苦手分野は、人付き合いは得意か、なぜ高学歴なエルフが奴隷になったのか。

アルバートはそれに一つ一つ淡々と答えていった。グレンも一通りのことを聞くと、下世話な追求をすることはなかった。やはり見た目と中身が違っていているようだ。アルバートは確信した。

そして屋敷につく直前、グレンは驚くべき発言をした。

「お前には、うちの家令になってもらおう」

と。

首輪をつけた家令など聞いたことがない。

そのとんでもない命令に哑然としたアルバートだったが、さらに彼の屋敷に到着してからはその寂れ具合に驚くことになったのだった。

アルバートが自己の選択を後悔しかけた瞬間であった。

夕食後、アルバートはエイミーを呼び出した。

「それで、ティエラの様子は？」

「まだ何とも。この屋敷の仕組みが何もかも信じられないみたい」

簡潔な質問に、エイミーは苦笑を洩らした。

「……森エルフは警戒心が強い。もともと仲間以外にはなかなか心を開かないからな。奴隷になった経緯もろくなものじゃないだろう。時間はかかるかもしれないが、彼女が心を開くまで根気強く付き合っ
てやってくれ」

アルバートがため息をついて言うと、エイミーはくすりと笑った。

「確かに。あなたは私より先に来ていたのに、グレン様を信頼する
ようになったのは私よりも後だったものね」

グレゴリー邸では二人は古参の使用人だ。エイミーの方がアルバ
ートより半年ほど遅れてこの屋敷へとやってきた。最初は戸惑って
いたエイミーだったが、順応するのは早かった。逆にアルバートは
いつまで経っても壁が取れなかった手合いである。

アルバートは彼女の言葉に少々気まずげに視線をそらしたが、や
がて咳払いをして気を取り直した。

「女性同士の方が何かと分かりあえることも多いだろう。何かあれ
ばすぐに報告してくれ」

「はい、かしこまりました」

エイミーは茶目つけたつぷりに笑った。

と、エイミーは窓の外へと目をやった。

「でも意外と早くに慣れるかもしれないわね」
「うん？」

彼女の視線に釣られるように、アルバートは窓の外へと視線をやった。

星明かりの照らす中庭で、森エルフと海エルフの少女が怒鳴り合っているようだった。

「喧嘩するほど仲がいいって言うもの。友達ができたらきつと早いわ。あなたもエイダと仲良しでしょう？ 案外森エルフと海エルフって相性がいいのね」

てらいのない笑顔でそう言われ、アルバートはこめかみを押さえた。

B面 奴隸の印

新しい服を自慢したいように、新しい部下も自慢したいものである。

アルバートは高名な学院卒。しかも森エルフ。家令見習いとは言え、地方領主が部下に持てたなら鼻高々にもなるというものだ。

初の奴隸購入から数日後、グレンはアルバートを連れて領地を回ることにした。

そこそこ田舎の領地とはいえ、商店街もあれば休日に屋台の出るような大通りも存在する。

グレンは執事とアルバートを連れて視察ついでにそれらを見て回った。

「何か食いたいのものはあるか？」

「いえ、お気になさらず」

「そう遠慮するな」

「空腹ではありませんので」

屋台を冷やかしながらグレンはアルバートに尋ねてみるが、きっぱりと断られてしまった。

実はアルバートに便乗して屋台の食べ物食べたかったのだが、そう上手くはいかないらしい。やたらと見た目で怯えられるグレンが屋台の食い物を買ってこいなどと言うと、領主という肩書きもあってやたらと大騒ぎになってしまったため普段は自重しているのである。しかし領主とはいえ、屋台の出来たてのファーストフードが食べたい時はあるのだ。

見事目論見が外れて少々落ち込んだグレンであったが、すぐに頭

を切り替えた。

とりあえずは視察だ。ついでに新しい部下を皆に見せびらかしてやろうではないか、と。

さて、その時グレンは自分にとって生涯まわりついてくる前提を忘れていた。自分の容姿である。

考えてもみてほしい。

金持ちのでっぷりと太ったゴブリンのような醜い男が、奴隷の証である鉄の首輪をつけて小奇麗な格好をした若い美丈夫のエルフを連れまわしているのである。

部下と紹介されようが、勘ぐるなという方が無茶だったかもしれない。

グレンがそのことに気付いたのは、顔なじみの店の男が揉み手をしながらニヤニヤと話しかけてきた時だった。

「やや、そちらは奴隷ですか。また見事な森エルフですな。まあまあ、なんともはや、領主様におかれましては素晴らしい奴隷をお買い上げになられて。……あちらの方も、さぞやよろしいんでしょうな？」

「……ん？ ああ……？」

いつもよりも五割増しのうるささで一方的にまくしたてる男に辟易しつつ適当な生返事をしてしまったグレンは、五秒ほど考えて自分の致命的なミスに気付いた。

「ほほほ、そうでしょうそうですね！ さすがは領主様。結構なことでございますなあ！」

グレンは眩暈を感じた。ちょっと油断すれば地面に崩れ落ちそうなほどのショックだった。

女性にモテないのはしょうがないと諦めてきたが、まさかそんな性癖があると誤解されるとは思わなかったのだ。しかも店主がそのことを疑っている様子はこれっぽっちもない。道理で道中アルバートに好奇の視線や憐憫の視線が向けられるはずである。

そこそこ面識のある店の店主がこれである。いわんや交流のない領民をや。

「……気分が悪い。帰る」

正しく言うなら心が折れそう、である。

顔色を変えておべっかを使う店主に構わず、グレンは帰路についたのだった。

彼はノーマルである。いくらモテなくとも、そこまで見境をなくしてはいない。

さて、屋敷へと戻ったグレンは考えた。

きっと誤解されたのは、奴隷の印が目立ち過ぎたせいに違いない、と。そもそも下働きならともかく、家令にするなどというのは世間の常識からするとまずあり得ないことである。だからこそ領民達も穿った見方をしたのだろう。

というわけで、グレンは数少ない部下の一人に、奴隷の鉄の首輪の代替となる奴隷の印と分かりにくいものを探させた。マイナーで

はあるが、鉄の首輪以外にも奴隷の制御装置は存在しているのである。

そして数カ月の搜索の後、部下が見つけてきたのは革の首輪であった。チョーカーに見えなくもない、そこそこスタイリッシュなデザインである。

そしてそれを付けたアルバートと共に視察に出かけたグレンは、そういうプレイが好きなのだろうと勘違いされていると気付いて再び心に多大なる傷を負うことになった。体が弱いせいか性欲が地の底まで落ちているが、彼はノーマルである。体のサイズと同じくSでもMでもない。アブノーマルな性癖などない。

躍起になったグレンはさらに部下に命じて別の制御装置を探させた。

数カ月後に見つかったのは、リボン型制御装置であった。

それも当初首にまいてはいたが、やはり多大なる誤解を生んでしまふということに気付いたグレンはリボンを髪をまとめるのに使うように命じた。アルバート以下、他の奴隷も同様である。使用形態が使用形態であるから、着脱も本人ができるようにした。ただ、入りたての奴隷に限っては外れないようにして首に付けたままにするようにした。

グレゴリー邸の使用人のほとんどが奴隷でありながら奴隷の首輪をつけていないのはこういう理由からであった。元に戻る日も二度と来ないだろう。

A面 胸の澱

回数を分けて行うと言われたエイミーによる研修は二時間ほど終わった。

残った夕食までの時間は再びエイダと一緒にあって、今度はハウスメイドの仕事をする事になった。

グレゴリー邸では基本的に夕食がその日の仕事の終わりの合図である。食器洗いや他の仕事があるものは別であるが。ティエラたちの仕事も夕食前に終わった。

ハウスメイドの仕事は、基本的に家事の延長だ。ティエラも故郷にいたときは家事をこなしていたため、特に問題はなかった。何故かそのことにエイダが感心しきりで馬鹿にされているのかだろうかと思ったティエラだったが、どうやらそうではないらしい。

「初仕事はどうだった？」

食堂で夕食をとっていると、クレアがにこやかな顔でティエラの隣に座った。

白い体毛に覆われた獣人もやはり皆と同じく紺色のお仕着せを着ていた。クレアはそれに加えて白いカーディガンを羽織っていた。

「……特に何も」

「そう」

素っ気ない返事だったが、クレアが気にした様子はない。むしろ

にここにこと上機嫌だ。

「初日からちゃんと働いてくれて嬉しいわ。家事も得意みたいだし、物は壊さないし、暴れないし」

「ぐっ」

元氣よく食事を口に突っ込んでいたエイダは急に喉を詰まらせた。

「エイダの時は本当に大変だったのよ」

「クレア、それは言わなくてもいいじゃん！」

むせたせいか涙目になっているエイダが抗議する。クレアはくすくすと笑った。

ティエラは今日一日一緒に仕事をした時のことを思い出し、内心でそういうこともあったんだろうなと納得した。

海エルフの性^{さが}なのか、エイダはとにかく豪快なのだ。がさつとも言う。しばしば力加減を間違ってはモップをぶつけたり、バケツの水をこぼしたりしていた。今ですらそうなのだから、来た当初はもっとひどかったのだろう。

それからしばらくクレアはティエラに当たり障りのない世間話を振ったが、ティエラの返事はすべて素っ気ないものばかりだった。親切で言ってくれているとは心のどこかでわかっているのだが、今のティエラにはそれに応える余裕がなかった。

食事が終わって去り際、クレアはティエラの手を握って言った。

「眠れなかったり、辛いようだったら私の部屋にいらっしやい。力になるわ」

ティエラはそれにうなずくことができなかった。
優しい言葉が嬉しく、しかしその優しさに反発する気持ちもあったのだ。

夕食後、一旦与えられた部屋に戻ったティエラは、ぼんやりと窓の外の闇を眺めていた。

昨日今日と、状況が随分と変わった。

嘲笑を浴びせられることもなければ、首輪で苦しめられることもない。周りの人はみんな親切で、ティエラに笑顔で話しかけてくれる。

一体何がどうなっているのか、わからない。不安が消せない。家族に相談したい。しかし、家族はもういないのだ。彼女のいた村の人たちは、奴隷にされたか殺されたかだった。

家族や近所の人の断末魔を思い出し、ティエラは身を震わせた。
みんな、みんな死んだのだ。

そして奴隷に堕ちた自分は、二度と元の生活に戻ることはできない。
い。

その事実がたまらなく悲しかった。

ふと気づくと、エイダが彼女のすぐそばに立っていた。何かを言
いあぐねているようだったが、やがて大きく頷く。

「ちょっとついてきて」

そう言うと、エイダはティエラの腕を掴んだ。

「ちょ、ちよつと……!」

抗議の声にかまわず、エイダはずんずんと歩き出す。振りほどこうにも、海エルフの力は森エルフのそれよりも遙かに強いのだ。

そのまま部屋を出たエイダは一階へと階段を下り、そのまま屋敷の庭へとティエラを引っ張っていった。

二人はそのまま突き進み、中庭にある東屋へとやってきた。

尖った屋根の石造りの東屋は、庭師がしっかり手入れしているのだろう、綺麗なものだ。作りつけのテーブルと、丈夫そうな椅子が三つ置いてある。

「座りなよ」

唐突に手を離れたかと思うと、エイダが言う。

「いきなり何なの？」

立ったままティエラが尋ねると、ひと足早く椅子に腰かけたエイダは行儀悪く両手で頬杖をついた。上目遣いでティエラを見る。

「夜のここ、アタシのお気に入り場所。いいトコでしょ？」

「……まあ、そうね」

エイダの言葉に釣られるように周囲を見渡したティエラは、不本意ながら同意せざるを得なかった。

星明かりに照らされた庭は、確かに神秘的で美しかった。貴族の館に一般的な計算づくのシンメトリーの庭ではない。どこか自然の森を思わせる奔放さがあった。自然を好むエルフにはとても居心地

がよい。

ティエラは自然に椅子に座った。

「何か話があるんでしょう？」

静かに問いかけると、エイダは頬杖をついたまま口角を少しだけ上げた。

「なーんか、あんたが辛くて辛くて死にそうって顔してたからさ。クレアにも有難迷惑です、話しかけないでって顔してたし」

軽い口調の言葉だったが、そのせいでティエラの神経が逆なでされた。凶星を指された後ろめたさもあり、ティエラは激昂した。

「あなたには関係ないでしょう！」

思い切り睨みつけるが、エイダは堪えた様子がない。

「あるよ。おんなじ場所で働く仲間じゃん。森エルフってのはちよつとやだけど、同室だし、私があんたの指導役で先輩だし」

その言葉に、ティエラは激しく劣等感を刺激された。首に巻いたリボンが首を絞めてくるような錯覚すらした。鉄の首輪をつけられた時の傷は治ったが、まだ見えない傷が残っているようだった。

「あなたになんか……あなたになんか、分からない！」

ティエラは涙声で叫んだ。

「家族を殺されて村を焼かれて奴隷にされた私の気持ちなんか、あ

なたに分かってたまるもんですか!」

辛くて胸が張り裂けそうだった。ティエラが目から涙がこぼれる。

本当なら今頃、家族でご飯を食べているはずだった。

本当ならあと数年もすれば、村の誰かと恋をして結婚するはずだった。

本当なら――

来るはずだった平和な日々が、招かれざる客によって崩壊した。それも最悪の形で。

二度と戻らない日々と、二度と戻らない顔が頭をよぎる。

目を伏せて嗚咽を漏らすティエラを黙って見ていたエイダだったが、やがてぽつりと呟いた。

「そんなの、アタシだって同じだよ」

「……………え?」

ティエラが視線を上げると、エイダの静かな眼差しと目があった。エイダは再び頬杖をついた。

「アタシのいた村は海エルフばかりが暮らしてる小さなところでさ。平和に暮らしてたんだけど、お祭りの日に男衆が飲む酒に毒が入ってた。皆が苦しんでる隙に鎖持った人攫い達が来て女衆を捕まえようとした。反抗してた子は殺された」

抑揚のない声が東屋に響く。ティエラははっとして身を固くした。体が急速に冷えていくようだった。

「アタシは母さんが納戸に隠れてなさいって言うから隠れてた。母さんはもう年だったから価値がないって殺された」

「……お父さん、は……？」

恐る恐る尋ねると、エイダはちつと大きな舌打ちをした。

「『俺の娘がいる、娘をやるから俺は見逃してくれ！』って、人攫い達に命乞いしてアタシを納戸から引きずり出したんだよ、あの根性無しの糞親父。あんなの海の男の風上にも置けないよ」

心底忌々しげにエイダは言って立ち上がった。外の風景を見るように、東屋の外を見る。

「糞親父はアタシを引き渡したすぐ後に切り殺されてた。馬鹿だよね。村を襲うような人攫いが、生き残りを見逃すわけないじゃん」

エイダは遠い日のことを思い出す。

海エルフは頑丈だ。たとえ毒を盛られて血反吐を吐きながらも、家族を守るために戦う男達がたくさんいた。女でも武器を持って外敵を打ち倒さんとしていたのがたくさんいた。

海エルフは頑丈だ。奴隷の首輪をつけても、痛みを堪えて反撃する者もいる。だから人攫い達はそう言った者は商品にならないと見切って早々に殺していった。

知り合いの断末魔を聞き、母親の亡骸を見て、父親に裏切られてしまえば、エイダに反抗する気力など沸くはずもなかった。

「アタシね、思うんだ。奴隷にとって一番辛いのは、奴隷審査を待つ最初の三日だって」

奴隸といっても、首輪をつけたらすぐに奴隸となるわけではない。首輪をつけるにはその領内の役所に申請をする必要がある。

まず仮の奴隸となったものは、その地域の役所へ行って名前を登録する。するとその名前が公示される。

三日以内にその奴隸の親族、あるいは恋人や同僚などの関係者が異議申し立てをすると申請内容が審議され、異議申し立てが正しいようであればその奴隸は解放され、奴隸を連れてきた人間が処罰される。

逆に、どんな人物であろうとも三日間誰からも異議申し立てがなければ奴隸の申請が通ってしまう。

村単位での仕事をする人攫いは、そういった異議申し立て申請を出させないためにあらかじめ襲う村の領内の役所の人間を取り込み、念のために商品にならない村の人間を皆殺しにするのがほとんどだった。

ティエラやエイダの村も例外ではない。

また、奴隸が一人二人であれば、その攫った場所から遠隔地まで連れていき、そこで初めて首輪をつけてその役所に申請する人攫いもいた。その場合、被害者の関係者などまずいために奴隸の申請が却下されることはないのだ。

そして新しく誕生した奴隸たちは、あつという間に人攫いから奴隸商へと売られていく。高価な奴隸ならいざ知らず、普通の奴隸ならばいちいち売買契約の記録も残さない。そのため、奴隸になってしまってから彼らの足取りを追うことは実質不可能である。

「奴隷審査が通りましたって言われた時さ、あーもう誰もアタシを助けてくれる人はいないんだなー、家族も村のみんなも死んじゃったんだなーって嫌でも分かるじゃん？　それまで必死で誰かが助けてくれるはずって思って待ってたのに、もう自分を必要として助けてくれる人っていないんだ、って分かった時には泣けてきちゃって」

そう言ってエイダは笑うが、少しだけ声が震えていた。

「ご、ごめんなさい、私……」

青ざめた顔で言うティエラに、エイダは今度こそ笑った。そして彼女の肩をばんばんと叩く。

「いいよ、気にしなくて」

その強さにティエラは思わず眉をしかめた。エイダがそれに気付いてごめんごめんと謝る。

そして、

「アタシは別にあんたの気持ち全部わかるなんて言わないし、わかるとも思わない。でもアタシだって他の皆だって、奴隷になったときとかここに来る前にはいっぱい辛い目にあってたけど、今は楽しくやっていけるからさ」

エイダはともすればぶっきらぼうにも思える調子で言った。

「言いたいこと言いなよ。グレン様だって他の皆だって、あんた一人くらいなら受け止める度量があるんだから。ね！」

その言葉にティエラの涙腺が一気に緩んだ。

胸にたまった思いが一気に噴き出し、視界がにじむ。

ティエラは東屋の床にへたり込むと、子供のように声を上げて泣き出した。

エイダは何も言わずに彼女の傍にしゃがみこみ、その背中を撫でた。

励まそうと必死で背中を叩いたエイダの力が強すぎたことでティエラが切れて喧嘩に発展したのはそれから間もなくのことである。

B面 挑戦者と協力者

グレンがいる世界では、魔法というものが存在した。

しかし魔法を使えるのは魔力を持つごくごく限られた者だけだった。

そして使える魔法というのも制約が多く、一部の例外を除けば長ったらしい呪文と長ったらしい儀式が必要となるものばかりだった。それもメインは呪術や戦争での攻撃魔法で、実生活に応用できそうな類ではない。

つまり、魔法による便利なあれこれは全くと言っていいほどなかった。

「――飢饉対策で大事なものは食物の貯蔵と交通、つまりは流通網の整備だ」

アルバートが家令になってまもなく、執務室で顔を突き合わせながらグレンはアルバートに力説する。

「食物の貯蔵は分かりますが、流通網とは……？」

あまり聞かない単語にアルバートは疑問を呈した。

グレンは黒板に図を描きながら説明した。

「生産と消費の間には往々にして隔たりがある。その隔たりを埋めるのが流通網だ」

グレンは説明する。

例えば、農産物にしたところで、生産地で全てを消費するわけではない。農家は自分たちが生産した分くらいかを余所へ売って外貨を稼ぎ、そこで得た外貨で自分たちが生産できないものを買って来なければならない。

どこへ行ってどのように売るか。売った商品はどのように流通していくのか。流通網が発達していればいるほど、円滑な経済活動が行えるというものである。

勿論田舎に行けば自給自足がメインになってくるが、それでも完全に外部と隔絶して生活するのは難しい。

「天候不順やネズミの大量発生で飢饉が生じた際、全ての地域で急速に食料不足になるわけじゃない。私の領内でも過去のデータを見ても分かる通り、飢饉の際に死者が多く出た地域と全く出ていない地域とがある」

グレンは数字の書かれた資料を示す。

アルバートがそれに目を通すとなるほど、距離にすればたかだか馬で十日ほどしかかからない距離にある村同士であるにも関わらず、片方では十数名の餓死者が出ていた。

実際問題、小さいものでも山を一つ挟めば食糧事情が変わるということはよくあることだ。そういった情報は中央には集まりやすいが村ごとの情報網が弱いため、当事者たちは知らないことが多い。というか、都市部の食料の担い手ともなる農家が流動されては政府も困るため、意図的に隠している面もある。

「生産物、特に食糧系は傷むまでの時間が短い。その結果、その日数の間で運べる場所が消費できる範囲になる」

今度は地図を出してきたグレンは、離れた二か所に印をつけると、

真鍮製のコンパスでそれを中心に円を描いた。

「例えば1の村では食料生産に余剰があり、2の村では不足しているとする。この円は食料が流通する範囲だ。流通範囲が狭ければ、食料生産に余剰があるにも関わらず2の村での食糧不足が解消されない」

そして今度は少し半径の大きめの円を先ほどと同じ場所を中心にして二つ描く。

範囲の広くなった1と2の円が重なる。

「流通網を広げたなら、こういった風に需要と供給が一致することも可能だ。1の村は余剰食糧を2に売ることができる」

アルバートは地図をじっと見つめて考えた。

「……ですが、流通網を広げるといっても具体的にはどのような？」

「うん、そこだ」

グレンは頷いた。

「一番手っ取り早いのは運送手段を向上させることだ。移動スピードが上がれば商圈も広くなる」

日本で言うならコンビニやスーパーが分かりやすいだろう。駐車場がないコンビニやスーパーなどは徒歩圏が商圈であり、つまりは近所の人が買いに来ることを狙っている。逆に駐車場付きコンビニ、スーパーならばある程度距離が遠かろうと客が自動車で行ってくる。移動手段があればある程、消費者の行動範囲は広くなるというわけだ。

グレンの前世は一般的なサラリーマンであった。そんな彼に農業の専門知識などはない。また、留学中に調べてみたが、農学書というのも意外に少ない。本を書ける程の知識人たちは、詩歌の対象でなければ農学などには興味を持っていないのだ。

そんな彼に農業改革など出来るはずもなく、彼に出来ることと言えば、自身の得意分野から攻めることだけである。

ただしやはりこれも問題点があった。時代の最先端をいきすぎてもはやグレンの思想そのものがオーパーツ状態になっているのである。彼の知っている理論は現代であるからこそ実現できるというものが多く、こちらとのすり合わせが必要不可欠だった。また、虚弱体質に加えて交渉事に向かない容貌であるので、彼の手足となって動く優秀な部下も必要不可欠だったのである。

「大事なものは距離じゃなく移動手段だ。移動手段があれば距離の隔たりは埋められる」

よしんば河を一つ越えた対岸の村に食料があろうとも、そこへ行って戻るまでの十日かかるようであれば、距離は遠かろうと五日で戻って来れる別の村に行った方がいい。

アルバートはしばらく考え込んでいたようだが、やがておもむろに口を開いた。

「食料を運ぶ移動手段と言えば馬車か徒歩か馬か……ですが、それを早くなさると？」

「道の整備もそうだが、馬車の車輪にゴムを使うか床にスプリングを仕込めたらいいんだが……」

荷馬車というと、簡易な作りの物が多い。よって、乗り心地も悪く、あまりスピードを出すと中の商品が傷んでしまうことが多いのである。

車輪にゴムを履かせたり床にスプリングを仕掛ければ揺れが緩和されるのだが、なにぶんゴムなどは高級品である。

「あるいは馬に荷物をくくりつけて、便数自体を増やすか」

流通経路が開通していない集落というのは得てして少人数集落である。ならば、一度にたくさんの方料を消費する必要もない。

やや思案した顔のアルバートだったが、再び口を開いた。差し出がましいようですが、と前置きをすると、立て板に水という表現がぴったりな様子で喋り出す。

「荷馬車の本数を増やすのも移動距離を増やすのも、どちらも同じ問題が生じます。まず費用。馬車にしろ馬にしろ、それを運ぶ人件費がかかります。商人に任せる場合でも、そういった孤立気味の集落の場合、儲けが少ないので商人は敬遠する場合があります、なにかしら補填をする必要があると思われます。また、特に飢饉の際は盗賊の被害件数が跳ね上がりますので、そういった際には必ず、そうでなくとも平時でも護衛を雇っておく必要はあります。馬車のための馬の維持費もかかります。上質の馬車を作る費用もかかりますね。

次に情報面。定期的に報告書は上がってきてはいますが、食糧不足の時には食料余剰がある地域でもそれを隠す事例が多いようです。余剰があると分かった場合、盗賊に狙われる恐れがあるためです。そのため、流通網を拡大しようとしても肝心の商品が出回らない可能性があります。

また、全ての村々に金銭があると限りませんので、普段からの貯えがなければ飢饉の折の食料を買えるとは限りません。

それから通行税もありますので、領内ならともかく、それ以外の場所への物の流通を円滑にすることは難しいかと思われます」

アルバートが意見を述べ終わった時には、グレンは机に突っ伏していた。

かなりこの世界に適応したと思っていたグレンだったが、やはりどこかまだ日本の平和ボケを引きずっていたようだ。

日本ではコンビニの食料を積んだトラックを襲う人間はいないし、余剰生産物を価格調整のために処分することはあってもあること自体を隠して売らないということもなかった。また、食料が買えないくらいの貧乏というのも想定外だった。同じ国内での通行税も同様である。

日本の物流作法を異世界に持ち込むというのはかくも難しいものなのか、とグレンは落ち込んだ。

しかし、とグレンは思い直す。

「その問題を一つずつ潰していけばなんとかできると思うか？」

問いかけると、優秀な家令は即座に答えた。

「斬新な試みになると思います」

珍しくも好戦的な声だった。どうやらアルバートも乗り気でないわけではないらしい。グレンの心に闘志の火が灯った。

「ならやるか」

グレンは体の中からやる気がふつふつとわき上がるような気がした。難題に挑むのも、そしてそれに協力してくれる部下がいるというのなかなか楽しいものである。

「他にもいくつかやってみたいことがあるんだが……」
「是非伺わせていただきます」

打てば響くような反応に、グレンはにやりと笑う。

できることしかないのは二流の仕事だ。「だからできない」を「だからできる」に変えることこそやりがいのある仕事なのである。

人生八十年、すでに四分の一は終わっているが、まだまだこれからである。偉大な企業家たちを見習って、彼も不屈の精神でやってやろうと誓ったのだった。

さて、当初こそ奴隷を買いに行く際はグレンが足を運んでいたのだが、途中から彼はそれを止めた。予想以上に風評被害が広まると分かったからである。

グレンのいる国では奴隷は違法ではない。何しろ奴隷は聖書にも出てくるほど古くからいるし、神が奴隷を否定したという文言は一

切ない。神の子たる預言者も奴隷制度を否定してはいない。

また、不定期だが頻繁に食糧難が起こるご時世では、口減らしに奴隷制度は役立った。親権者の同意さえあれば、その子供を奴隷として引き渡すことは可能だったからである。奴隷といってもピンからキリまであるが、なんにせよ命あつての物種だ。売られた奴隷は働く限りはある程度の食料はもらえるし、子供を売った親もそれで得た金で生き長らえることができる。

また、地方によってはどうしても偏ってしまう労働者を再配分する意味もあつた。農業や鉱業では人手が欠かせないが、飢饉の後などでは主力となる労働者が不在となっている場合も多々あるからだ。

しかし、しかしだ。考えてもみてほしい。

新領主に代替わりした途端、使用人が次々と辞めていく屋敷。

新しい使用人も長続きせず、逃げるように辞めていく屋敷。

屋敷の主人はおぞけが走るほどの醜い容貌。

日々荒れていく屋敷の主人は、何故か多数の奴隷を買い始める……

どう考えても悪い方向へしか想像力が働かない。

基本的に貴族の屋敷というのは、身元のはっきりしている人物を雇うのだが、そんな屋敷に自身の大事な子供を奉公へ上がらせようと思う親がいるだろうか。いるはずがない。

しかしいくら人手不足であろうとも、奴隷を積極的に使用人の代わりにしようなどという馬鹿はまずいない。何しろ奴隷は戸籍を抹消されていることもあり、どここの馬の骨とも知れない人物が混ざり込んでいるからである。

となれば、グレンのしていることは周囲から見れば奇異どころかありえないほどの異常な行為である。よって、対外的にはそういう

風に装って玩具として買い集めているだろうというのが概ねの意見だった。

というわけで、アルバートに奴隷購入を一任したグレンだったが、予想以上にそれがよい結果を生んだ。

「……………妖精の、奴隷？ いるのか、そんなの」

アルバートの報告にグレンは目を丸くした。ただでさえ妖精というのは希少種族なのに、ましてやその奴隷である。

「次回や次回の予算を使い切ったんじゃないな」

グレンが懸念して言うと、アルバートは涼しい顔で言った。

「今回は予算を使いませんでした」

「……は？」

思わずグレンは訝しそうな声を上げる。

「今回は先日購入したミランダの同期を買いに行く予定だったのですが――」

と、アルバートは説明する。

グレンの提案で、奴隷を買うときは同時期に二人以上五人以下という風になっていた。同期がいた方が精神的にも良いし、教育もまと

めてやってしまえるから、という理由からである。

「妖精の奴隷をオークションで十万シリルで購入された方がいたのですが、その方がミランダの生き別れの父親だったとかで」

「……………うん、それで？」

突っ込みどころが多かったが、グレンは堪えて続きを促した。

「是非ミランダを引き取らせてほしいとおっしゃったので、その方が落札した妖精の奴隷と交換してきました。妖精が弱っていましたので、現在下でエイミー達が看病しています」

悪びれた様子なくアルバートは言う。

確か前々回くらいはアルバートはたまたま奴隷商の閉店バーゲンのなものに遭遇したと言って、格安で五人の奴隷を買ってきたはずだ。

グレンはしばらく顎に手を当てて考えていたが、結局言ったのは、

「よくやった。お前の引きのよさには感心する」

という、無難な一言だった。

アルバートの驚異的な引きによってその後も掘り出し物を引き当てていくことになるのだが、その時の彼らは知らない。

A面 心が凍る時

海エルフは体格がたくましく、森エルフは華奢である、と一般には言われている。

ティエラは森エルフの女性の特徴をよく備えているように見えた。夜目でもわかるほどにほっそりとした体つきと、星明かりの下でもわかる金色の長い髪はまさにそれである。

唯一違うと言えば、森エルフの女性は滅多なことでは怒鳴らないというところだろうか。

エイミーとの話を切り上げて数分。未だにエイダとの口喧嘩がやまない同族を見ながらアルバートはため息をついた。

「いつまでやってるつもりだ。もう消灯時間は過ぎているぞ」

アルバートが中庭の草を踏み分けて二人に近付くと、それまで子供のような喧嘩を繰り返していた二人が示し合わせたように口をつぐんだ。

そして一瞬の沈黙の後、

「何よアルバート！ 喧嘩売りに来たの！？」

「ご、ごめんなさい……」

返って来た正反対の言葉にアルバートはやれやれと肩をすくめた。

「エイダ、部屋に戻れ」

珍しくもお小言がないことにエイダは目を丸くした。明日は嵐かな、と小声で呟く。アルバートはそれを黙殺した。

「あ、ティエラは？」

「……少し話がある。部屋の場合は分かるな？」

アルバートがティエラを見て言う。

「は、はい」

いきなり何の話だろうか、とティエラは身構えた。

アルバートと最初に会ったのは奴隷商で売り物としてだった。その時は一言二言挨拶のような会話をした。

その後は奴隷商の男が屋敷までティエラを送り届け、着いてすぐグレンと対面した。そして歓迎会。

思い起こせば、ティエラと彼は会話らしい会話をしたことがない。初対面の時の印象もあるせいか、同族であるにも関わらず未だに彼女は彼が苦手だった。アルバートが笑わないからかもしれない。

「よし、ならエイダは部屋に戻れ」

言外に邪魔だと言われてエイダは頬を膨らませた。

「ふーんだ！ アルバートのケチ、スケベ、おたんこなす！」

「……お前の頭は単なる帽子を載せる台か？ 早く部屋に戻れ」

「アルバートの馬鹿鹿！」

子供のように言い放つと、エイダはそのまま部屋の方へと駆け戻っていった。

「あいつは子供か……」

アルバートはため息をついた。

その様子に思わずティエラはくすりと笑ってしまったが、アルバートが視線を自分に向けたことに気付いて慌てて表情を改めた。

アルバートは特に気にした風もなく、木立の間にある切り株風の椅子に腰かけた。

「君も座れ」

「……はい」

ティエラは小道を挟んで彼の正面にある椅子に腰かけた。

「初仕事はどうだった？」

先ほどのエイダとの会話の時とは打って変わって感情のこもらない声アルバートが尋ねてきた。仕事モードに切り替えたらしい。そのことにもティエラはいささか居心地の悪さを感じた。

「……皆さん親切にして下さったので、なんとか」

「同室のエイダとは――」

言いかけて、アルバートはふっと口元を緩めた。それだけでもどこか作りものめいた印象から感情ある生き物へと印象が変わった。

「上手くやっていけそうだな、さっきの調子だと。なかなか息も合ってた」

くっとおかしそうに笑う。ティエラは顔を赤らめた。その様子に再び小さく笑ったがそれは一瞬で、すぐさま彼は仕事用の声音に戻した。

「体調が悪いということとは？」

「いえ、大丈夫です」

「ならいい。弱ってるように見えたが」

「そんなことはありません」

やはりティエラはこの彼の淡々とした喋り方が苦手なようだった。早くこの時間が終わってくれないかと、やや早口で答える。

「そうか？」

ティエラの答えにアルバートは僅かに目を眇めた。

「随分と弱気になっているように見えるが」

凶星を突かれてティエラは言葉に窮した。

奴隷商にいるときははなけなしのプライドで虚勢を張っていたが、予想外に優しくされてしまったせいで弱い心が出てきていたことは事実だった。

「……………そう見えるかもしれません」

迷った末ティエラはそう口にしたが、アルバートは短く相槌を打っただけだった。

ティエラはアルバートの顔を伺ったが、何故か彼は目を伏せて考えごとをしているようだった。

沈黙が続く。

「あ、あの」

沈黙に耐えきれなかったティエラが声をかけると、アルバートは視線を彼女に戻した。

「さっきエイダが、自分は奴隷だって言ってて、昼間にエイミーさんもここにいて皆が奴隷だって言っていました。本当なんですか？」

にわかには信じがたい事実だった。だが、ティエラには先ほどのエイダの言葉が嘘だとは思えなかった。そしてエイダは言っていたではないか。自分だって他の皆だって、奴隷になってここに来るまでは辛い目にあっていたのだ、と。

彼女の言葉に、アルバートは少しだけ笑った。自嘲めいた響きはなく、どこか面白がっている風ですらあった。

「言ってなかったか？」

そう言って、彼はリボンで束ねていた髪を解いた。白いリボンを彼女の目の前に差し出す。

「この屋敷ではこれが奴隷の印だ。奴隷は体のどこかにこれを付けている。君の首にもついているだろう」

言われて、ティエラは首を抑えた。

柔らかな布で作られたリボンを引っ張ってみるが、解ける気配はなかった。

「ああ、入って間もない奴隷は外れないようにしてある。体を洗う時限定で外すことも可能だが、屋敷に慣れたらいつでも外せるようになる。それまでは我慢してくれ」

そう言つて、アルバートは元のようにリボンで髪をまとめ始めた。背中まで届く長い白銀の髪を手慣れた様子でリボンでまとめる姿は、ティエラの目にはひどく不思議なものに映った。

そして今更ながらに、この屋敷の中でも地位が高いであろうアルバートが奴隷であることに疑問を感じた。

「このお屋敷に、普通の使用人はいないんですか？」

ティエラの質問に、アルバートは眉をしかめた。

「数年前に最後の一人が辞めたつきりだ」

無然とした声で言うと、アルバートはため息をついた。

ティエラの心の中にいくつもの疑問が次から次へと沸いて出る。

それを察してか、アルバートは言う。

「もう時間も遅い。明日の仕事に響いたら問題だ。次で最後の質問だな。残りは明日エイミーにでも聞いてくれ」

相変わらず簡潔な物言いだったが、短い会話の間にティエラは幾分か彼のことを苦手でなくなっていた。

同じエルフで同じ奴隷であるということで親近感がわいたせいかもしれない。もしくは自分と同じ境遇の仲間が欲しかったのかもしれない。

ティエラは触れてはいけない話題に触れてしまった。

「アルバートさんも人攫いに攫われて奴隷に？」

その瞬間、アルバートの全身から殺気が放たれたような感覚を
イエラは覚えた。あまりの恐ろしさに足が震える。

「私は――」

アルバートは感情を無理やり殺した声で呟くように言った。

「私は親友だと思っていた男に売り飛ばされたよ」

アルバートは歯を食いしばった。

久しく会わなかった親友と杯を交わすのに、何のためらいがある
うか。

ジャスティン・アッカーソンとアルバートは、それまでは親友と
呼ぶに足る間柄だった。

同じ村で幼いころから切磋琢磨し、同じ学都で学び、職場は違えど都で就職した。故郷では家族ぐるみの付き合いもあり、もはや兄弟と言っても過言でないほどだった。

当時のアルバートの婚約者リタも彼らの幼馴染で互いに仲がよく、近いうちに結婚しても家族ぐるみの付き合いは続くだろうとアルバートは思っていた。

「なあ、アルバート。リタとは最近どうなんだ？」

ジャステインの部屋で乾杯をした直後に尋ねられる。

「最近の仕事が忙しいから全然会えない。手紙もあまり。今度昇進が決まって、今引き継ぎの仕事を大急ぎで片付けてる。ひと段落ついたらリタをこっちに呼んで、結婚式のことも話し合いたいと思ってるんだ」

アルバートは照れくさそうに言い、誤魔化すようにワインをあおった。

エルフの寿命は人間の三倍ほどもある。しかしその長い生涯で伴侶とするのはただ一人だけだ。その一人を心から信頼し、愛する。アルバートもまた、婚約者のリタのことを心から愛していた。

「そうか……」

ジャステインはそう言うのと黙り込んだ。

かと思うと、突然くつくつと不気味に笑いだした。

「なあ、アルバート。実は俺、お前に言ってなかったことがあるんだ」

「なんだ、いきなり。変な笑い方だな」

アルバートは顔をしかめた。

しかしジャステインは相変わらず不気味に笑い続けると、おもむろに立ち上がった。

「実はな、アルバート。お前は知らなかっただろうが、俺はずっと前からリタのことが好きだったんだ」

「ジャステイン、お前何をいきなり……！」

突然の告白に驚いたアルバートは思わず立ち上がった。

が、すぐに手足に上手く力が入らず、彼は床に膝をついた。手にしたグラスが床に落ちて砕け散った。意識に靄がかかったように、急速に遠ざかるのがわかる。

「ジャステイン……お前まさか……」

アルバートは呆然としながらジャステインを見上げた。自分の身に起こっていることが信じられなかった。徐々に手足に力が入らなくなり、体を起していることすら困難になっていく。

「ああ。ようやく薬が効いてきたようだな。いいざまだ」

ジャステインは心底嬉しそうに笑うと、自分のグラスに残っていたワインをアルバートに浴びせた。赤い液体がアルバートの服に赤い染みを作り出した。さながら刺殺死体のように。

口を開くよりも先に、アルバートは意識を失った。

アルバートが目を覚ますと、そこは薄汚れた建物の中だった。

首に違和感を感じて手をやると、じゃらりと重い金属音がする。

首輪につながった鎖が立てた音だった。

アルバートは弾かれたように身を起した。首元を確認する。金属製の首輪がついていた。壁にと首輪とをつなぐ鎖が騒々しく音を立てる。嫌な予感が臓腑からせり上がってくるようだった。

「お目覚めか、アルバート」

嘲笑交じりの声がした。

アルバートが顔を上げると、そこには喜色満面のジャスティンと、見知らぬ男がいた。

「ジャスティン、これはどういうことだ！」

アルバートは未だに治まらぬ頭痛をこらえながらジャスティンを睨みつけた。立ち上がるうにも手足に力が入らない。よしんば立ち上がったとしても、首輪と繋がっている鎖のせいで彼に詰め寄ることはできなかっただろうが。

ジャスティンは口角をくつと上げると、嬉しくてたまらないといった様子で話し始めた。

「お前のもの分かりが悪いからだよ、アルバート」

ジャスティンはゆっくりとアルバートに歩み寄ると、侮蔑しきった目で彼を見下ろした。そして不意にくつくつと笑う。

「リタは俺のものだ、アルバート。リタだって自分をほったらかしにしてるお前より俺の方がいいって言ってくれたんだからな」

そう言っ、ジャステインは懷から緑色の宝石のついたペンダントを取り出した。

訝しげに目を凝らしたアルバートだったが、すぐにその顔から血の気が引いた。

エルフには生涯の伴侶となる相手に絆石と呼ばれるものを互いに渡し、肌身離さず持ち歩くという風習がある。対になったその石は相手との絆が切れぬ限り割れないと言われている、愛の誓いの印だ。

そしてジャステインが持っているのは、アルバートがリタに渡したそれだった。

アルバートは頭が真っ白になった。リタが肌身離さず身につけているはずの絆石をジャステインが持っている理由が上手く理解できなかった。いや、したくなかったと言った方がいいだろう。

しかし気がつけばアルバートは立ち上がり、すぐ傍まで近づいてきていた
ジャステインに殴りかかっていた。

が、突然全身を切りつけられたような痛みがアルバートの体に走り、彼は床に崩れ落ちた。

その激しい痛みは、アルバートの嫌な予感が当たっていることを示唆していた。

「ははは、俺に暴力を振るおうなんて百年早い。――奴隷風情が」

吐き捨てるような言葉と共に、ジャステインの蹴りがアルバートの体に直撃した。アルバートの意識が一瞬遠のいた。

「さあ、じゃあ売買を始めましょうか。――そうだな、こいつは百シリルでいい」

「た、たった百シリルで!？」

「ああ。その代わり、精々不細工で変態な貴族のところに玩具用にでもして売ってくれ」

ジャステインの言葉には、アルバートへの憎しみがはつきりと表れていた。

あまりのことにアルバートは吐き気を覚えた。

親友だと思っていた男に、これほどまでに憎まれているとは思ってもいなかった。そして生涯の伴侶と信じていた婚約者に裏切られるとも。――自分が奴隷になるとも。

信じられない出来事の連続で、狂いそうだった。

嘘だと思いたいのに、首に巻かれた金属の環がこれが現実であると主張していた。

「し、しかし町中でエルフがいなくなれば、騒ぎになるのでは？ 奴隷審査が通らない上に捕まって処刑なんてごめんですよ」

小太りの奴隷商が恐々と言う。するとジャステインは鼻で笑った。

「安心しろ。この男のことは、みんな目障りに思っている。消えて

くれて清々するだろうな。誰もこいつの奴隷申請を邪魔しようだなんて思わないさ。絶対に異議申し立てはない」

自信たっぷりにジャスティンが断言する。奴隷商の男は少々不安そうではあったが、百シリルでエルフの奴隷が手に入るという誘惑に負けたのか、最終的には金をジャスティンに渡したのだった。

「じゃあな、奴隷のアルバート」

ご丁寧にもアルバートの顔に唾を吐きかけると、ジャスティンは意気揚々と帰っていった。呆然自失のアルバートは、気がつく鍵のついた部屋へと移動させられていた。

ややあつて、事態が呑み込めた彼に沸き上がってきたのは激しい怒りの感情だった。

これ以上ないくらいの裏切りだ。殺してやりたいくらいの怒りがジャスティンに対して燃えあがる。

アルバートには勝算があった。

ジャスティンはいは言っていたが、アルバートは自分が優秀な役人だと自負していた。友人も家族も自分の味方だと信じていた。

奴隷の首輪が付けられたところで、審査が通るまでは三日ある。彼が薬で意識を手放してからそう時間は経っていないだろうから、

恐らくは同じ町にいるはずだった。それならば、奴隷審査で自分の名前さえ告げれば、誰かが必ず異議申し立てをしてくれるはずだった。亜人の失踪は、人攫いの被害に遭っているケースが多いからだ。

奴隷申請が却下されれば、ジャスティンの悪事も明るみに出る。婚約者の裏切りも、もしかしたらジャスティンの嘘かもしれない。全てはジャスティンを断罪してからの話だ。

そうアルバートは考えていた。

しかし予想は外れ、その三日後、アルバートの奴隷申請に異議申し立てをする人物は誰一人としていなかったため、彼の奴隷申請は通ることとなった。

同じ町にいる親戚、職場の同僚、かつての恋人でさえ、アルバートに救いの手を差し伸べることがなかったのだ。

アルバートの心は絶望に染まり、完膚なきまで打ち碎かれたのだ。
った。

アルバートは知らなかった。

リタへの恋情を募らせたジャスティンが、アルバートを排除するためだけに長い時間をかけて策を講じていたことを。

ジャスティンが自分に隠して転職していたことも、そこで信頼を勝ち取って仕事を任されていたことも、彼が奴隷審査の手続きをする役人だったということもアルバートは知らなかった。

本来ならば公示されるはずのアルバートの名前は、ジャスティンの手によって全く別人のものとして公示されていた。出鱈目の名前の奴隷に、異議申し立てをする人物などいるはずがない。

そしてジャスティンは同郷の親友という肩書きを利用して、周囲の人間にアルバートの失踪理由を誤魔化していた。

彼の失踪が判明した頃には、すでにアルバートはその町を出ていた。

いない人物に抗弁や釈明などし得るはずもない。

ジャスティンにそそのかされた者たちは、こぞってアルバートに暴かれかけていた自分の罪をいなくなった彼になすりつけた。

そうしてアルバートの失踪は、数々の自分の罪が周囲にばれた為の遁走だと認知されてしまった。

そのため、かつてのアルバートの知人で彼が奴隷になったことを知っていたのはただ一人、ジャスティンだけであった。

B面 生物学者ベン

領主の仕事と言うと色々あるが、グレンが思うにやはり領地経営によって収益を上げることが一番大事だろう。何しろ国から課せられる兵役は、金さえあれば傭兵を雇うという非常手段が講じられる。地獄の沙汰も金次第ということだ。

グレンもグレンなりに領主を継ぐ前から色々政策を講じていた。しかし父親に進言してみてもは全て鬱陶しそうに却下されたし、かといって領主になってからは部下とのコミュニケーションがうまく取れなかった。

そしてようやくアルバートという至って冷静に会話できる相手に恵まれた方がいいが、やはり一人で考えた政策は穴だらけだった。アルバートも優秀ではあるが、どうにも二人だけでは限界があった。

グレンは痛切に思っていた。

ブレインストーミングがやりたい、と。

さて、グレンが部屋で思い悩んでいた頃、彼の屋敷の前に行き倒れている人間がいた。

「ちょっとマーカス！ 来てみなよ！ 誰か倒れてる！」

「また猫だったとかいうオチじゃないか？」

庭師のテッドが声を上げると、外で薪割りをしていたマーカスがやってきた。

テッドのところへ言ってみると、なるほど、確かに男がうつ伏せに倒れている。薄汚れてボロボロになった外套を纏い、大きな鞆を肩から下げていた。

「見ない顔だね。物乞いにしちゃ立派な鞆だし、巡礼者かな？」

「貝のブローチがついてるか？」

貝のブローチは巡礼者の証である。巡礼者ならばなんらかの施しをせねばならない。

マーカスは無造作に男を仰向けにすると、その胸元に視線を落とした。それらしいものは付いていなかった。

「違うみたいだな。まあいいか。もうすぐ昼飯だし、食堂に連れていくか」

「え！？ いいの、そんな勝手に」

「細かいことは言いつこなしだぜ、テッド」

からからと笑うと、マーカスは行き倒れの男の体を肩で担ぎ、そのまま食堂の方へと歩き出した。

「……まあいいか」

テッドも一瞬逡巡したものの、すぐにマーカスの後について歩き出した。

行き倒れに食事を与えているという報告を受けて様子を見に行つたグレンは、それが知己の人間であることに目を丸くした。

「ベン・ハストン？ なぜ君がここに」

ちょうど食事を終えてのんびりと白湯を飲んでいたベンはグレンの顔を見て表情を明るくした。

「グレゴリー君！ 久しぶりですね。学院を卒業して以来でしょうか」

ベンはニコニコと笑って立ち上がると、グレンに近付いて手を差し出す。グレンがその手を握ると、ベンは力強く握り返した。

「グレン様のお知り合いですか？」

マークスが驚いたように言う。

「専攻分野は違うが同窓生だ。卒業後は国に戻ると聞いていたが」

さらに言うなら学生時代のグレンの唯一の友人でもある。人当たりの良い笑顔を絶やさないことが特徴の男だ。ある理由から友人は少ないのだが。

「グレゴリー君の家を目指して来ていたのですが、道に迷ってしまったのですよ。そして気が付いたら君の家に。幸運です」

「いや、それは別に迷ってなかったんじゃないか？」

グレンは呆れ気味に言うが、そういえばこの友人が意外に運が良いことを思い出して頭を抱えた。本当に偶然かもしれない。

「とにかく、私の部屋で話そう」

「そうですね。積もる話もありますし」

「……いや、やっぱりその前に」

足を踏み出したベンに、グレンは待ったをかけた。彼の汚れた風貌をつくづくと眺め、顔をしかめた。

「風呂に入って着替えろ。臭い。話はそれからだ」

「替えの服がありません。グレゴリー君、貸して下さい」

「相変わらず図々しいな。まあ使用人の分を貸してやろう。お前臭い」

「何を言っているんですか。人間誰しも体臭というのは存在します。ですがここは僕が大人になります。お言葉に甘えましょう」

「よし、マーカス。ベンを風呂にぶちこんでこい」

「へ？　は、かしこまりました」

二人の会話を呆気にとられながら見ていたマーカスは、グレンに声を掛けられて姿勢を正した。気を取り直してベンを浴場へと案内する。

ベンは特に気を害した様子もなく、それに着いて行った。その場にいた数名の使用人たちはベン・ハストンをこう評した。

ちよつと変わっている人だ、と。

さて、小一時間ほどかけて身綺麗になったベンは応接間でグレンと向かい合って座っていた。

「普通気を使ってもう少し早く済まそうと思わんか」

「気を使ったからこそ十分に身綺麗にしてきたのです。細やかな心遣いですよ」

「君は相変わらずだな」

「そういうグレゴリー君も相変わらずですね」

背後で控えていたアルバートはその会話を表情にこそ出さなかったが物珍しげに眺めていた。彼の主も口こそ悪いが今日は随分と機嫌が良いようだ。

「君の評判は聞いていますよ。美形の亜人奴隷を大量に買い集めて男女のハーレムを築き上げている奴隷王だと」

いきなりろくでもない話題が出た。

にこやかにベンが喋っているせいで、内容とのギャップにアルバートは口の端が引きつりそうになった。

グレンは深々とため息をついている。

「出鱈目だ。普通の使用人が辞めていくから奴隷を使用人にしていくだけだ。そもそも私に男の趣味はない。あと無理強いも趣味じゃない」

「残念です」

ベンは肩を落とした。

「寮から図書館へ移動するだけでもバテていたグレゴリー君に毎日

夜伽の相手がいるほど体力がついたのかと喜んでいたのですが」

「お前はいつもそうだが考え方がおかしい」

グレンは眉間にしわを寄せながら言う。しかしこういった遠慮のない失礼すぎる会話ですら楽しいのだから、友人が少ないというのも考えものである。

「ところでそちらのエルフはグレゴリー君の秘書ですか？」

興味津々でベンが尋ねてきた。

「家令のアルバートだ」

「へえ。亜人が家令なんですね」

感心したようにベンが呟く。エルフというと亜人の中でもいい意味で特別視されているが、それでも亜人ということには変わらない。人口のほとんどが人間で占められているこのあたりでは、亜人というのはそれだけで下に見られがちである。地位の高い人間ほど亜人よりも人間を使う。

理由は至って単純で根深い。宗教だ。

国教でもある宗教の聖書には人間こそ高貴という思想が記されている。古くからその宗教があるせいか分からないが、亜人の貴族は存在しない。

そのため亜人の家令というと差別的な目で見られがちなのだが、珍しくも彼の言葉にはそう言った響きがなかった。

「スキエンティア学院の卒業生だ」

「なるほどなるほど、合理的な君らしい選択ですね」

ベンはうんうんと嬉しそうにうなずいていた。そのことに気分を

よくしたグレンだったが、

「やはり君は僕が見込んだ男です。君に是非頼みたいことがあります」

「何だ？」

何故か嫌な予感を覚えつつ、グレンは尋ねる。

ベンは相変わらず人当たりの良い笑顔で言う。

「僕をこの屋敷で雇ってほしいのです」

「……確か君は祖国で学者をするんじゃないかったか？ そちらはいいのか？」

かつてグレンやベン、そしてアルバートが学びに行っていた学都というのは特殊な都だ。様々な国からの留学生を受け入れている。ベンは西方の国からやってきたと言っていた。

「はい、それなんですけど困ったことに」

ベンは世間話でもするかのごとく気軽な調子で言った。

「教会から破門されてしましまして、国にいられなくなったんですよ」

「……………はあ!？」

思わずグレンは目をむいた。

この辺の国はどこも宗教とは切っても切れない関係にある。教会から破門されたということは、表社会からドロップアウトしたも同然である。

「一体何をしたら教会に破門されるんだ!? 昔に異端審査に掛けられかけた私ですら未だに破門されてないんだぞ!？」

ちなみにかつてグレン少年が密告によって異端審問に掛けられかけた理由は「容姿が醜いから」であった。悪魔の子ではないかと言われたが、たまたまその時は領主であったグレンの父の顔とふくよかな体の母を知っていた異端審査官がいたため、一笑され却下された。コネクションは大事である。

「実はですね、国で遺伝についてまとめたものを論文で発表したのですが、神に対する冒瀆だと学会を追放されてしまいました。ついでに異端審問にも掛けられたのですが、国外追放と破門を条件に命だけは見逃してもらいました」

ははは、と明るく笑うベンだが、ことは重大である。

「……………もしかして、遺伝の論文ってあれか」

思い当たる節のあったグレンは頭を抱えた。

「はい。グレゴリー君に教えてもらった遺伝の法則です」

メンデルの法則。現代日本なら中学生以降なら大抵知っている生物学の一つである。生物の遺伝における優性遺伝、劣性遺伝、分離、独立などの法則だ。

学生時代に生物学に人生をささげていたともいえるベンが親と子の形状が変わるのは何故かという疑問を抱いて寝食すらおろそかにしていたのを見かねたグレンが教えてしまったものである。といっても、随分と前に習ったことなのでグレンが教えられたのは優劣のある「遺伝子」という概念だけだったが。

それでも常に頭が科学脳だったベンは、実験に実験を重ねた結果分かったことを論文にまとめてしまったというわけだ。

「……あと五十年は発表を待てと言ったろう」

「真実は常につまびらかにされるべきです」

「教会から破門もされるはずだ」

グレンは頭痛を堪えるように眉をしかめた。

聖書によると、人は神の創造物なのだそうである。人は生まれる際に神や天使から祝福を受け、それぞれの能力や形状の素地を得る。要するに、人間の全ては神から与えられたものなのである。トンビが鷹を産むのも、エンドウマメの鞘の形状が親世代と違うのも、全ては神のまにまにということになっている。

よって、遺伝子云々というのは神や生命の神秘に対しての冒瀆と言っても過言ではない。

科学として様々な事象を解明するには今はまだ時期尚早なのだ。

「世の中の解明されていない事象の全てが神の御技ということにして考えることを止めてしまえば、進歩はありません。学者が神がいるという前提を持つこと自体がおかしいのです。たとえ僕が異端者と呼ばれて学界から追放されようとも、真実が変わることはありません」

お前はガリレオ・ガリレイか、とグレンは心の中で呟く。

グレンが持つ科学やら思想やら政治やらの前世の知識は間違いく異端である。いくら正しかりうと宗教が幅を利かせているこの世界ではその考えを発表したところで時代の最先端どころか理解不能

の狂人のたわごとと言われるだろう。グレンにはかつて正しいことを訴えながらも宗教や政治によって迫害されて悲惨な末路を辿った偉人たちの知識もあった。総合して考えると、彼の結論はいつも同じところに辿りつく。

すなわち、沈黙は金である、と。

「グレゴリー君ならば僕の考えも理解してくれるかなと思ひまして。以前は国のしがらみで君からの誘いを断ってしまいましたが、今ならば大手を振って受けられます」

「ものは言いようだな」

グレンはため息をついた。貴重な友人を助けたいという気持ちはあるが、異端審問会に目をつけられるのはなるべくならば避けたかった。追求されてしまえばグレンなど間違いなくこんがりウェルダンの焼き豚にされてしまう。

「心配ご無用です、グレゴリー君。僕もちゃんと考えていますよ」

自信たっぷりなベンは胸を叩いた。

「グレゴリー君、僕を君の奴隷にしてください」

グレンは固まった。

そんな彼に気付いているのかいないのか、ベンは続ける。

「その後ほとぼりが冷めたら……そうですね、三年くらいでしようか。そうしたら戸籍を再取得させてください」

そこまで聞いて、ようやくグレンも合点がいった。

「なるほど、一度ベン・ハストンを消して別の人間に生まれ変わるということか」

「その通りです。名案でしょう？」

「とんでもない名案だな」

グレンは苦笑した。

奴隷審査が通ると、戸籍は抹消される。実質死亡とほぼ同義である。

しかし奴隷の主人の許可さえあれば、奴隷を解放した後には戸籍を新しく取得することは可能だ。その際の名前はある程度の制約はあるものの自由に変えられる。

写真が存在していないこの世界においては、よほど顔が知れ渡っていない限り一度名前さえ変わってしまったえば異端認定されたベンであつても教会の追及を逃れられるはずである。

が、普通はこんなとんでもないことを考える人間はいない。奴隷から解放される保証などないし、そもそも奴隷に身を簍すなど大抵の人間は矜持が許さないだろう。

「しかしまあ、面白い。その提案には乗ろう」

「ありがとうございます」

グレンが手を差し出すと、ベンはその手を握った。

グレゴリー邸に新しい仲間が加わった瞬間だった。

「アルバート、お前にも改めて紹介しておこう。私の学友で、生物学を専攻していた――」

「ベン・ハストンという名前は捨てますので、新しい名前が必要ですね。グレゴリー君、君がつけてくれませんか？」

話を振られてグレンが悩んだのは一瞬で、すぐに閃いた名前を告げた。

「ベンジーでどうだ？」

「ベンジーですか。いい名前ですね」

まさか有名な映画の野良犬からとったとは言えないが、彼の性格にはあっているだろうと思ったのだ。どうやらベンも気に入ったらしい。

生物学という一見経営の役には立たなさそうな学問を専攻していたベンジーだが、彼の知識が政策に大いに役立つと判明するのはそれからすぐのことだった。

A面 来歴とこれから

過去のことを思い出して苛烈な顔を一瞬覗かせたアルバートだったが、すぐに我に返ったように表情を改めた。

「すまない、怯えさせるつもりはなかった」

「い、いえ。私こそ失礼なことを聞いてしまってごめんなさい」

ティエラは肩を落とした。アルバートは苦笑して立ち上がった。

「気にするな。もう過去のことだ。未だに引きずってる私が未熟なんだ」

「でも……」

「この屋敷にいる奴隷は、大抵人攫いが原因で奴隷になっている者がほとんどだ。往々にしてあることだ」

それでも、とティエラは思う。

エルフにとって仲間というのは何物にも代えがたい宝である。エルフは本来仲間としか交流しない孤高の部族だ。そんなエルフにとって、友人とは生涯の相棒のようなものだ。まして親友ならば、心臓をえぐられた方がまだましだというくらいに辛かったに違いない。

今にも泣き出しそうな顔をするティエラに、アルバートは目を細めた。

「私が奴隷になって、一カ月もしないうちに婚約者との絆石が砕け散ったんだ。親友どころか婚約者にまで裏切られて、その時はなぜ自分が生きているのか不思議なくらいの気分になったし、死んだ方がましだと思ったよ。その後にも色々あって家族とも故郷とも元婚

約者とも縁を切った。しかし――」

アルバートはひよいと肩をすくめた。

「新しい人生も悪くない。前のことを思い出さなくらいには楽しく過ごせている。君にもいずれはそう思う日が来たらいいんだが」

エルフにあるまじき発言に、ティエラは目をぱちぱちと瞬かせた。その様子がおかしかったのか、アルバートは喉の奥で小さく笑う。

「もう夜も遅い。部屋に戻れ。私も部屋に戻る」

そう言ってアルバートはティエラに背を向けた。

残されたティエラはしばし固まっていたが、肌寒さに身を震わせて立ち上がった。外での長話が過ぎたせいか、夜風で体が冷えている。

彼女は足早に部屋へと戻る。消灯時間が過ぎているせいか、屋敷の中は極端に暗かった。夜目の利く亜人でなければまともに歩くことも難しいだろう。

ティエラは物音を立てないように注意しながら階段を上がる。

アルバートの発言はティエラの想像の範疇を超えていた。家族とも故郷とも縁を切ったと言うことは、少なくとも彼の縁者は生きているのだろうか。それなのに、どうして縁を切ってしまったのか。そして、どうしてそれで平気なのだろうか。

いや、彼だけではない。エイダもアルバートとは違った形ではあるが、家族の裏切りと喪失を体験している。それでも彼女たちは明るいし、もう過ぎたことだと言う強さがある。

自分が弱いのだろうか、とティエラは思った。

家族も故郷も失ったことが悲しく、同時に不安で仕方がない。頼れる人がいないということが怖くて怖くて仕方がないのだ。

エイダが自分を気遣ってくれたことは嬉しかった。クレアや他の屋敷の使用人たちが心配してくれることも、とてもありがたい。しかしティエラにはまだ、彼らが家族だとも仲間だとも受け入れられないのだ。

自分もいつかは変われるのだろうか。

悶々と悩むティエラが自室の扉を開けると、ベッドの上で座っていたエイダがぱつと振り向いた。

「お帰り！ 遅かったね。部屋に戻ってくるとき迷わなかった？」

「うん、大丈夫。先に寝てくれて良かったのに」

「別にあんたのこと待ってたわけじゃないよ。寝る前のお祈りしてただけ」

エイダはつんと顔をそらす。その割にはチェストの上に十字架がほつたらかしになっているのだが、ティエラは触れないでおいた。なんとなく、くすぐったい。

「明日も早いんだから、もう寝るよ」

エイダがぶっきらぼうな口調で言う。ティエラは素直にそれに従って、ベッドの中にもぐりこんだ。

「おやすみ」

「おやすみ」

そのありふれた挨拶を口にしたことが随分久しぶりだと思い出し、ティエラはぎゅっとシーツを握りしめた。

翌朝、ティエラは日の出とともに目を覚ました。エイダはまだ寝ている。

カーテンの隙間から差し込む朝日に引かれるように、ティエラは窓際へと歩み寄った。

眼下には昨日の中庭が見える。木々が生い茂っているため、例のベンチは見えなかったが、ティエラの心を静めるには大いに役立った。

すでに起き出している使用人がいるらしく、ちらほら人の姿も見える。しばらくぼんやりとティエラは窓の外を眺めていた。

と、エイダがごそごそと身じろぎをした。

「ティエラ……？ いま、なん……じっ!？」

弾けるようにエイダが身を起す。カーテンの隙間から差す朝日を見て顔色を変えた。

「やば、寝坊だ！ ティエラも急いで準備して！」

「え？ でも昨日は」

「昨日は特別！ 早くしないとクレアに雷落とされちゃう！」

エイダは慌ただしく身支度を始めた。ティエラも釣られるように慌てて準備をする。

彼女らの健闘が功を制し、時間になっても現れないエイダたちの様子を見に来たクレアがドアをノックするのと、準備を終えた彼女たちがドアノブに手をかけるのは同時だった。

雷は小さいもので済んだ。

イモの皮をむきながらエイダは言う。

「昨日言ったかもしれないんだけど、私たちの仕事には朝食の準備も入ってるんだよ。朝食が始まる一時間くらい前には食堂でお手伝い。人手不足だからね」

「そしてエイダは寝坊の常習犯！ 改めて言うけど、エイダが寝てたら叩き起してちょうだい」

エイダの仕事ぶりを見に来たらしいクレアが渋い顔で言う。ティエラは苦笑した。自分も寝坊したようなもので、なんとなく肩身が狭い。

「まー、過ぎたことは気にしても仕方がないって」

「あなたは気にしなさい」

クレアはやれやれと肩を落とした。

「ところでティエラ、昨日はよく眠れた？」

「あ、はい。大丈夫です」

「うなされたりとかはしなかった？ エイダの寝言がうるさくて夜に起きたりとか」

茶目っぽくクレアが笑う。ティエラも釣られて笑った。

「ふふ、大丈夫です。ぐっすり眠れました」

「そう。よかったわ」

心底嬉しそうにクレアが笑う。

「それじゃあ二人とも、また朝食で」

そう言うのと、クレアは颯爽とその場を去っていった。

「クレアさんって面倒見がいいのね」

彼女が去っていった方を見ながらティエラが言うと、エイダは少しだけ誇らしげな顔をした。

「ま、我らがカウンセラーせんせい医師だからね」

聞き慣れない単語にティエラは首をひねった。

「カウンセラーせんせい医師？」

「んー、まあ一言で言うとお医者さん、みたいな」

エイダはイモを剥く手を止めずに言う。遅くはないが、皮が随分と分厚い。

「クレアってセラピアって獣人の種族なんだけど、セラピアの人達ってみんな治癒魔法が使えるんだって。それに加えて心の治療？
そういうのも勉強してる人が多いんだってさ」

「心も病気になったりするの？」

ティエラはエイダに比べると少々遅いが、綺麗にイモの皮を剥いていく。それをこっそり盗み見た料理人は、足して二で割るとちようどいいのに、と内心でひとりごちた。

「そうみたい。気になるんだったらあとでクレアに聞いてみたら？」
「うん、そうする」

頷いて、なんとなく会話が途切れた。

ティエラは思う。

アルバートはこの屋敷には奴隷しかいないと言っていた。
となると、医者が務まるクレアでも元は奴隷だったということになる。

グレゴリー邸には人間の奴隷もいるが、アルバートやエイダのようなエルフや、獣人のクレア、ドワーフのブルーノなど他にも多数の亜人がこの屋敷にはいる。屋敷の使用人というからには、それなりに技能を持っている者たちだろう。

この屋敷にいる奴隷の来歴は、どのようなものなのか。考えるとティエラの胸は痛んだ。

ある時グレンはセラピア族を雇おうと言いだした。

グレゴリー家のお抱えの医者もいないでもなかったが、かの医者
は昔気質だった。奴隷や亜人など絶対診ないというのだ。

しかし奴隷といっても病気はするし、それまでの来歴のせいか、
心の傷を抱えている者も多かった。ゆゆしき事態である。

そんな折に、グレンはセラピア族の噂を聞いたのだ。

獣人のセラピア族は、種族的特性でほとんどの者が治癒魔法を使
え、さらには珍しくも精神的なケアにも力を入れているという。

さすがに医者 of 奴隷はいなかったし、せっかくならば使用人用
のお抱え医師兼セラピストを雇おうとアルバートを伴ってセラピア族
の里を訪れたのだった。

少々領地からは離れていたが、馬車に乗って二週間あまり。なん
とかセラピア族の居住地へと辿りつくことができた。

セラピア族は全身が白い毛で覆われた獣人だ。穏やかな気性で、
慈悲深いと言われている。

が、結果は惨敗。

グレンの外見で初対面の印象を悪化させ、さらに奴隷の医者とい
うことで難色を示され、さらには心の傷云々の説明であらぬ方向へ
誤解された。グレンの領地が遠いというのもマイナス要因だっただ
ろう。

老若男女全てに断られ、というか怯えられ、グレンは泣く泣く元
来た道を帰ることになったのだった。

そしてその帰り道のことだ。

たまたま旅の奴隷商を見かけたグレンは、アルバートの提案で商品を見てみることにした。

そしてその中に、全身が白い毛で覆われた獣人の女性を見つけたのである。

セラピア族ということ差っ引いても度の超えたお人好しな性格のせいでうっかり騙されて奴隷になっていたクレアが、奴隷生活一日目にして半生の雇い主と出会った日であった。

というわけで、クレアの来歴はグレゴリー邸の使用人の中では群を抜いて軽いもののだが、ティエラに知る由はない。

B面 ベンジーの意見

旧名ベン・ハストンは生物学に幼いころから人生を捧げている。ファールブルもびっくりな探究心と行動力でもって生物の全てを知りつくさんとしているのである。その知識量はちよつとしたもので、分厚い百科事典が十冊は頭に詰まっているだろう程の量だ。

ただしベンジーは生物学者の中では異端に属する。なぜならば、一般的な生物学者というのは専攻分野が細分化されていて、人間、亜人、妖精、虫、陸上生物、水生生物、植物などそれぞれの分野ごとの見識を深めるのに対し、ベンジーはそれら全てをひっくりくるめて学んでいるからである。

虫だって動物だって人だって亜人だって生物だ、というのが彼の主張である。

資料を見ながらベンジーはほう、と感嘆の声を上げた。

「村と中心街の間を走らせる無料定期馬車ですか。護衛に兵に加えて領民を賦役させるとはまた斬新な発想ですね。それに宅配便ですか……」

グレンたちがまとめた考えはこうだった。

流通を活発させるために相互ネットワークをするにはまだ時期尚

早である。早い話、特にこれと言った特色のない似たような農村と農村が交流したところで、特に得られるものはない。

ならばいっそ、繁華街——つまりは商店街などもあるグレンの屋敷の近くだが——をハブにして、物流を一旦中心でまとめてから分散させようというものだった。

広場に青空市もそれに合わせて開催すれば、物々交換でも貨幣取引でも可能となる。

それまで交通手段がない、あるいは費用が掛りすぎるために断念していた交易を可能にしようというわけだ。

さらには村への迎えの馬車にその村宛ての宅配便を載せていけば一石二鳥にもなる。

村行きは荷物も少ないのでグレンの配下の警備兵が、町行きはそれに加えて農民が警備に加われれば、安全度は増すだろうという目論見だ。それと同時に、領民が自身の村から出る機会を積極的に増やすことによって、余所との交流も持たせるようにしようという狙いもあった。

基本的に、領民は領主から農地を借りたり入会権を得たりするために年貢を納めたり賦役をこなしたりしなければならぬ。賦役というのは要するに、領主の命令に従って一定日数仕事をする事だ。現金で済ませることも不可能ではないのだが、特に田舎の農村ともなれば貨幣とは縁が薄い地域も多いため、年貢や賦役の割合が増えしてしまう。農民には労働力は貴重だ。長時間の束縛は困るし、かといって年貢の割合を増やすと自分たちの食べる分がなくなってしまう。

どうせなら、賦役を分割して、交易も同時にできるようにしたらいいんじゃないか？ という発想のもとでのアイデアだった。

グレンも領主の義務として、一定数の警備兵は確保している。し

かし戦争の気配がない昨今では領内の犯罪者の取り締まりぐらいにしか使えない。そして彼の領内は割と平和である。腐らせるよりは活用した方がいいだろうと思ったのだ。

「馬車は今作らせているが、どうにも実行可能か不安が残ってな。一通りの訓練は受けさせる予定だが、農民がどこまで警備としての役割をこなせるか分らない。それに外部との交流は過疎化を促す可能性もある。何かいい考えはないか？」

森の多いグレンの領地では、盗賊と並んで脅威となるのが狼である。盗賊は狙わないような荷物でも、狼ならば襲ってくる可能性もある。それに素人に毛が生えたような護衛がどこまで対応できるのか。

また、若者が外部との交流を持った場合、自身の農村での生活に嫌気がさして村を出ていくというケースも多いというのはアルバートの言である。護衛に出すのを所帯持ち限定にしてはどうか、というのが今のところの対抗策だ。

また、グレンの発案による五人組制も現在検討中である。

「確かに、素人では盗賊や狼に対抗するのは難しいでしょうね」

ベンジーの言葉にグレンは肩を落とした。
が、

「妖精の小道が使えたら万事解決なんですが……」
「妖精の小道？」

聞き慣れない単語に、グレンは眉を寄せた。随分とメルヒェンな単語だ。

アルバートの方へ視線を向けてみるが、彼も知らない様子である。

ベンジーはにこりと笑うと解説を始めた。

「妖精の小道とは、妖精たちが作っている独自の道のことです。妖精のみが使える魔法を使って空間と空間をつないで独自のルートを作っているそうですよ」

そう言ってベンジーは会議用の黒板に図を描き始める。

「これを一つの森とします」

大きな丸を描くと、その間に枝分かれしたいくつかの道を描き、その途中に何カ所かの印をつけた。

「妖精の悪戯で森の中を迷わせるというものが有名ですが、例えばこの地図の南東のこの地点に妖精の小道を作るとします。すると北から来た旅人がそこを通るとこのように、空間を一気に飛び越えて違う場所に出してしまうというわけです。この小道に引かかる限り、旅人は永遠に同じ場所をループしてしまいます。このように妖精は森の中に入ってきた人間を迷わせることもできれば、追い出すこともできるというわけです」

逆にいえば、上手く使えば移動時間を大幅に短縮することができるというわけだ。

「便利だな。その道はどうやって作るんだ？ 永続は可能か？」

「妖精たちが自分の意思で作るようですよ。力のある妖精が作れば長時間の維持も可能だそうです、どの妖精でも作れるそうです。といっても、そもそも知り合いでない限り妖精に会うことも難しい。僕は妖精学の権威の先生からこの話を聞いたのですが、その

先生も妖精にはたった一度しか会ったことがないそうです。グレゴリー君は妖精に会ったことは？」

ベンジীর言葉に、なんとも言えない顔でグレンとアルバートは顔を見合わせた。

「なあアルバート。この前お前がミランダの代わりに連れてきたのは……」

「温室におりますので、ただいま連れてきます」

一礼をしたアルバートは、言うが早いか部屋を出ていった。

「誰の話ですか？」

ベンジীは不思議そうな顔でアルバートの出ていった方を見ていた。

「……君に意見を聞いてよかったよ」

グレンはつくづくそう思った。三人寄れば文殊の知恵である。

その後、妖精のプリシラとの初顔合わせで興奮したベンジীは水を得た魚状態で彼女とのコミュニケーションを図りだした。

そして勢い、妖精の小道による流通計画と、妖精の好物である蜂蜜を作る養蜂業の起業計画を立てることとなったグレンたちであった。

グレンによるうろ覚えの養蜂の手法も、生物学オタクがいればな

んとかなるものである。

執務室でグレンとベンジーが午後のお茶を飲んでいたときの話である。

アルバートは所用のため席を外していたこともあり、友人同士の忌憚ない意見のやり取りを行っていた。グレンは執務机で報告書に目を通してながら、ベンジーは長椅子で覚書を見ながらお茶を飲みながらの気楽なやり取りだった。

「ところでグレゴリー君」

手もとの覚書をめくっていたベンジーはふと顔を上げて言った。

「なんだ？」

グレンはティーカップから口を離して彼に視線を向ける。

「君のところの奴隷は特に亜人が多いですね。何か特別な理由があるのですか？ 高いでしょうに」

グレンはすぐには答えず、お茶を一口飲みほした。

「――亜人は寿命が人間より長いし、高価で資産価値が落ちないだろう？ 再び売りに出す時も高値で売れる。美形ならなおさら」

言うてから、グレンは自嘲的な笑みを浮かべてティーカップをソ

ーサーに戻した。

「人でなしだろう？」

グレンは指を組んで机に肘をついた。

ベンジ―は覚書のノートを閉じるとグレンの方へと体を向けた。

「君が悪ぶるのはいつものことですが、人でなしだとは思いませんね、僕は。甘ったれだとは思いますが」

そう言って肩をすくめると、ベンジ―は暗い顔をした友人に言う。

「僕にとって奴隷というのは社会的な肩書きであって、生物的中身を示す分類ではありません。ですが結局、奴隷というのは一般常識で言えば物でしょう。奴隷は財産です。財産の価値を保とうというのは自然ですし、転売しようが捨てようが自由だと思いますよ」

ベンジ―の言葉に、グレンは眉間にしわを刻んだ。

「こんな境遇になった僕からすれば感謝しきりですが、学生時代から今の今まで奴隷や亜人を普通の人間と同一視している君の方が不思議です。奴隷を雇うなんて言い方もそうですし、さっきの君の口ぶりじゃ、まるで奴隷を資産扱いしていることに罪悪感を持っているみたいじゃないですか。一体どこでそんな価値観を育てたのか知りませんが、僕には理解しかねます」

友人の言に、グレンは苦い思いを抱いた。

価値観というのは環境に大いに左右される。思想もしかり。

十六歳になるまで、グレンもベンジ―のような価値観だったよう

に思う。が、強烈過ぎる前世の記憶は、それまでグレンの思想や価値観を丸ごと取り換えるに十分だった。乗っ取ると言ってもいい。

精神的にまだ未熟で甘ったれたったティーンエイジャーのグレンの精神と、四捨五入すると三十歳の社会人男性の精神では、どちらに軍配が上がるかは火を見るよりも明らかであった。

「奴隷になった途端、人じゃなくなるなんて私は思えない。切り離して考えるのが難しいんだ」

溜息のようにグレンは呟く。

奴隷はグレンが思っていた以上に人間くさかった。というか、人間との差異が首輪以外に見いだせなかった。帳簿上の勘定科目ならともかく、実際に奴隷を物として扱うには、あまりにも抵抗があった。

「まあ、だからこそこの屋敷の奴隷——ああ、君は使用人と言うんでしたね。彼らは君に心を開いて慕っているんでしょうね」

その言葉はグレンの罪悪感を大いに苛んだ。

前世の記憶は大いにグレンの生活の向上に役立ったが、折々にその記憶から構成される価値観がグレンの罪悪感を刺激するのだ。

「……ストックホルム症候群というのがあってな」

問わず語りにグレンは喋り出す。

「逃げられない空間で相手に生殺与奪の権利を握られると、時間が経つにつれ立場の弱い者は立場の強い者に対して好意や信頼感を抱くんだそうだ」

「初耳ですね」

「だろうな」

何しろ日本での知識である。ストックホルムという地名もこの世界には存在しない。

「しかし、憎しみを持つなら分かりますが、なぜ好意や信頼感を持つようになるんです？」

ベンジの問いに、グレンは力なく笑った。

「相手の機嫌如何で殺されるかもしれない状況では、相手に対して恭順するほうが生き残れる可能性が高いからな。尾を振る犬は打たれないってことだ。一種の生存本能だよ」

「なるほどなるほど。面白い説ですね」

ベンジは感心したように何度も頷いた。

「――ただし、あくまでそれは一時的な生存本能による自己暗示の結果に過ぎない。多くの場合、その状況から解放されるとそれまでの好意が全て憎しみに転じる」

グレンはそう言うと言を伏せた。

ベンジはその様子をじっと見つめた。

「つまり君は、奴隷たちの君に対する好意はそのストックホルム症候群のせいであると思っているんですね？」

「……………ああ」

逡巡の後、グレンは短く肯定した。ティーカップに手を伸ばすと、

すっかり冷めてしまったお茶を一気に飲み干す。

奴隷は決して主人から逃げられない。首輪があるからだ。グレゴリー邸の奴隷のように着脱可能なものならともかく、大抵の奴隷の首輪は持ち主の許可がなければ外れない。

よしんば逃亡に成功したところで、奴隷のほとんどは頼れる身内もないし、故郷から遠く離れた場所にいる。戸籍も抹消されている。

実質、奴隷の生殺与奪は主人となる人間に握られているのである。

グレゴリー邸にかつて勤めていた普通の使用人たちは、帰る家のあるものばかりだった。その彼らは皆、グレンを厭って辞めていった。

奴隷たちがグレンの容貌に慣れたのも、信頼してくれるようになったのも、全ては全て、ストックホルム症候群のせいではないのか？ という疑念が常にグレンにまわりついていた。

もしそれが当たっていれば、グレゴリー邸は随分と歪んだ場所である。

「君は度し難いほど損な性格ですね。まあその類稀なる容貌で生きてきたから仕方がないという面もありますか」

辛辣な台詞を吐いたベンジーだが、その顔はにこにこ笑っている。

た。

グレンが不機嫌に睨むと、ベンジーは肩をすくめて再びノートを開いた。

「確かに彼らがここに馴染んだとつかかりはそのストックホルム症候群とやらかもしれないが、君のやっていることは対奴隷どころか対人間と考えた場合でも十二分だと思いますよ。至れり尽くせりです」

ぺらぺらとページをめくりながら、ベンジーは言う。

「君はもっと自信を持ちなさい。大丈夫、君は根っここのところがどうしようもなく甘い人間ですが、性格が悪いわけじゃないんですから」

ベンジーの言葉に、グレンは複雑な面持ちで笑った。

A面 過去の知人

一晩寝て気持ちが整理できたこともあり、朝食の時も午前中の仕事もティエラは自分に声をかけてきた相手に笑顔で挨拶を返すほどには余裕ができた。

ちゃんと見てみれば確かに昨夜聞いた通り、使用人の誰しも体のどこかに白いリボンをしていた。

しかし誰も辛そうな顔をしていない。むしろ皆生き生きとして楽しそうだ。顔色も良く、健康であるのが見て取れる。

そして誰しも、ティエラに気付くと必ず声をかけてくれていた。そんなことにも気付けなかった昨日までの自分にやや自己嫌悪に陥っていると、エイダがティエラの顔を覗き込んできた。

「どうしたの、ティエラ。寝不足？」

エイダが心配そうな顔をしていることに気付いたティエラは、慌てて首を振る。

「ううん、ちょっとぼーっとしてただけ。気にしないで。ありがとう、エイダ」

エイダは目を二度ほど瞬きさせると、やがて満面の笑みを浮かべた。

「ん、ならよかった」

そう言うと、やたらと上機嫌になってエイダは雑巾をバケツの中に浸す。勢いが強すぎて水がとび跳ねたが、エイダは気付いていないようだ。さらに今にも鼻歌を歌いだしそうな様子で廊下の花瓶を

磨きだす。

ティエラはエイダが上機嫌の理由が分からず首を傾げていたが、気にしないことにした。

と、

「ティエラ、昨日はちゃんと眠れたか？」

背後から声をかけられ振り向くと、アルバートが書類を片手に立っていた。移動の途中なのだろう。

「はい、ありがとうございます。ぐっすり眠れました」

ティエラが笑顔で答えると、アルバートは少しだけ口の端を上げた。

「そうか。体調管理には気をつけろ」

「はい」

と、アルバートは彼女の傍で拭き掃除をしているエイダに目を移す。床に散っている水を見ると顔をしかめた。

「エイダ。水掃除の時は床に余計な水が散らないように気をつけろと何回言ったら分かる。拭きとるのも二度手間になるだろう」

さっそくのお小言にエイダは思い切り顔をしかめた。

「別にいいじゃん。するのは私なんだし。いちいちアルバートは細かいよ」

「滑って転ぶ人がいるかもしれないだろう」

「そんなの、足元に気をつけてない方が悪いんじゃない!」

「誰もお前みたいに山猿みたいな足腰を持ってると思うなよ」

「誰が山猿よ!？」

いきなり口喧嘩を始めた二人にティエラはどうやって止めようかとオロオロしてしまった。ぽんぽんと言葉の応酬をするので、口を挟む暇がないのである。

どうしようかと迷っていると、ティエラの肩を叩く人がいた。

「ティエラ、いいところにいたわ。時間が出来たから先に午後の分の研修をやりましょう」

と、エイミーが言う。

「で、でも二人が……」

困り顔でティエラが言うと、エイミーはエイダたちを一瞥したが、

「大丈夫よ。アルバートも今は休憩中だしあの二人はそっとしておいてあげましょう。いつものことなんだから。ティエラは自分の分の掃除道具を片付けたら図書室に来てね」

「は、はあ……」

困惑顔のティエラであったが、一向に口論が止む気配のない二人に諦めて片付けに入ったのだった。

エイミーによる研修二日目は、礼儀作法についてだった。

「この屋敷は領主館と役所の機能も兼ねているの。だからお客様もたくさんいらっしゃるし、身分の高い方々もいらっしゃるわ。使用人の態度を重視なさる方もいらっしゃるから、グレン様の顔に泥を塗らないよう、一流の接客をしましょうね」

「はい」

ティエラはしっかりと頷いた。

彼女が今までいたのは村という閉鎖的なコミュニティだった。しかしこの屋敷に来たからには、エルフ式礼儀作法も覚えなければならぬ。人一倍真面目なティエラからすると、非常に気負ってしまふ研修内容だった。

研修はお辞儀の仕方という基本中の基本から始められ、所作、言葉づかい、出迎え方、取り次ぎ方、見送り方、その他諸々。

その中にはティエラが知っていたものもあったし、知らないものもあった。一通りの説明が終わった後には、覚えることが多すぎてティエラの頭はパンクしそうになっていた。

それに気付いたのだろう、エイミーはくすりと笑う。

「最初から全部覚えろなんて無茶は言わないわ。少しずつ出来ることを増やしていきましょう」

そう言ってエイミーは薄い二冊の本を差し出した。

一冊は革の表紙、もう一冊は厚紙の表紙の本だ。革の本にはグレ

ゴリー邸使用人マニュアルと書かれている。

「まにゅある……？」

聞いたことのない単語にティエラは不思議そうな顔をした。

中を開いて読んでみると、先ほどエイミーが口頭で説明したことがらが事細かに記してあった。

「マニュアルっていうのは教本のことよ。グレン様のお考えでね、教える人によって教える内容が変わってしまうのはよくないからって、分かりやすく活字化したものを皆が持つようにしているの」

グレンが使用人教育の一環として始めたことである。

家、村、会社、国、何に限らずマナーやルールというものは存在する。情報の発達していない社会ではそれらは親から子、上司から部下といった風に受け継がれていくものが多いが、暗黙の了解となっているものも多い。

しかしグレンが雇う奴隷は出身地も種族もバラバラ。カルチャーショックに陥ることもしばしばだ。

ならばいっそ、使用人の仕事内容や礼儀作法などについてを全て文章化し、マニュアル化してしまおうとグレンは考え付いたのだ。大手外食チェーンから夢の国に至るまで、こと接客業でのマニュアルは非常に有用である。

画一的な規格を作り全ての使用人をそのレベルに達するようにすれば、飛びぬけて質のいい使用人はできないかもしれないが一定レベルの質の使用人は確保できる。

また、グレンが前世で学んだ経営論で、暗黙知と形式知というのがあった。

暗黙知とはそれまでの経験や勘で培ってきた知識のことで、言葉で表現すると難しい物のことだ。逆に形式知は文章や図式によって表現できる知識のことである。その暗黙知を形式化して共有することによって各個人の持つ能力レベルを均一化するという方法が多く、の場所で見取られていた。その代表例がマニュアルである。

明文化することによって、それまで個人で所有していた知識を皆で共有しようというのだ。

「ティエラ、文字の読み書きはできるのよね」

「はい」

「ならよかったわ。このマニュアルに書いてあることを、こっちのノートに書き写してちょうだい。書き写したものがあなたのマニュアルよ」

確かめてみるとなるほど、もう一冊の厚紙の表紙の本は中身が全て白紙だった。

結構なページ数と文字数にティエラは少しだけ落ち込んだのだった。

「マニュアルの最初の方にも書いてあるんだけど、仕事をする上で失敗した場合の方法っていうのがあってね」

と唐突にエイミーは言う。

「仕事ができないのには三つのパターンがあるの。一つ、知識がないから分からない。二つ、練習不足で出来ない。三つ、やる気がない。三つ目の場合はこの屋敷から出ていってもらふことになるけど、

分からないことは教えるし、練習にも付き合うから遠慮なく言っ
ね」

「は、はい……」

至って本気の様子のエイミーの言葉に、この屋敷の人は優しいけ
れどどこかにそれ以下は切り捨てるという明確なラインを引いてい
る気がする、とティエラは思ったのだった。

ふとマニュアルをめくっていると、最後の方にあるページに目が
留まった。

勤務中に奴隷となる前の知人に会った場合、と書いてある。思わ
ずページをめくる手が止まる。

『勤務中に奴隷となる前の知人に会った場合』

——相手が客人だった場合は、知らないふりをしていつも通りの
仕事をする。相手から声を掛けられた場合は答えてよい。また、
その場に主人がいれば、体調不良や他の仕事など適当な理由をつけ
てから許可を取って去ってよい。

親しい人であれば、その旨を主人に告げれば私語や近況報告など
はしてよい。ただし、屋敷の内部事情などの口外はしないこと。

ちょっと変だ、とティエラは首を傾げた。

後半部分は良いとして、前半部分がおかしい。まるで知人から逃
げたいように取れる。

「あら、その項目？ アルバート以外仕事中に知人に会った人なん
ていないから大丈夫だと思うけど」

「アルバートさんはあるんですか!？」

ティエラが驚いて目を丸くすると、エイミーはあ、と口を抑えた。思案顔をしたエイミーだったが、ややもすると苦笑をにじませた。

「一応ね。マニユアルにその項目がプラスされた原因がアルバートなのよ。ティエラはアルバートも奴隷だって知ってるわよね」

「あ、はい。友達に売られたって……」

と言ってから、ティエラははっとした。

「じゃあ、知人って……」

「そういうことよ」

エイミーは何とも言えない複雑な表情で笑った。

経済は自給自足では発展しない。交易や貿易をして外貨を稼ぐ必要がある。

グレンのいる国では、同じ国内でもそれぞれの領地を通る際にも関所で通行税を払う必要がある。関税もある。しかしそのコストを払ってでも、外部へ商品となる物を売る必要があった。

「サピエーンズ商店、ですか」

聞き覚えのない名に、アルバートは首をひねった。

執務室にてグレンとアルバート、ベンジーとでその日やってくる取引相手との商談についての打ち合わせをしていた。

「数年前から頭角を現し始めた隣国の貿易商ですよ。僕も国で名前を聞いたことがあります。亜人の夫婦で経営をしているそうです。夫は交渉上手で決断力に優れ、妻は流行に敏感で経理能力も優れているとかで、収益もうなぎ上りだともっぱらの噂です」

ソファに腰掛けたベンジーは楽しそうに言う。

「エルフの夫婦だという話ですし、もしかしたら夫婦揃って『慧眼持ち』じゃないかと僕は思っているんですよ」

「慧眼持ち、ですか」

アルバートの顔に疑問符が浮かんでいたのを察知したベンジーが我が意を得たりとばかりに説明を始めた。

「アルバート君はご存じありませんか？ 亜人の中には特殊な異能を持つ方がいるそうです。慧眼はその代表例ですね」

「私は初耳だったが、お前は知っていたか？」

グレンがアルバートに問いかける。アルバートは眉間にしわを寄せて考え込んでいたが、

「『祝福を受けた者』のことだと思います。私もそうですが」

「おやそうなんですか！ でしたらぜひとも調べさせていただきます」

いですね。よければ眼球を片方頂きたいぐらいです」

ベンジーは目をキラキラと輝かせながら立ち上がり、グレンの傍に立つアルバートへと近づく。アルバートは思わず身を引いた。

「それは駄目だ、色々と」

グレンが止めると、ベンジーはひとまず引き下がった。咳払いをして威儀を正す。

慧眼持ち、あるいは祝福を受けた者というのは要するに、常人より能力が優れている人のことだ。観察力、洞察力、聴力、視力、あるいは第六感。そういったものが常人よりも遥かに強い者が、エルフに限らず亜人の間にはしばしば生まれるのだそうだ。

その説明を初めて聞いた時、アルバートの異様なまでの引きのよさはそこから来ているのだろうとグレンは納得した。

「なんにせよ、手を組む相手としては悪くない。今日の午後に来る予定だ。お前は出張から帰って来たばかりで疲れているだろうが、もうひと働きしてくれ、アルバート」

「かしこまりました」

アルバートもベンジーも、体の弱いグレンに代わってあちこち飛び回ることが多い。十日ほどの出張から帰って来たばかりのアルバートは、いきなりの話に何故か嫌な予感を覚えた。

往々にして、嫌な予感というものは当たるのだ。まして、慧眼持ちの彼の予感ならば。

出張で少なからずアルバートも疲れていたのだろう。報告とその日の商談の内容の打ち合わせはしたものの、ある大事な一点を確認し忘れていた。

というよりも、後になって彼自身が振り返ってみれば、その時は無意識下でそのことを知りたくないがために先送りしようとしていたようにしか思えない。

応接室にノックの音が響く。失礼します、とエイミーが入ってきて、中にいるグレン達三人に告げたのだ。

「サピエーンズ商店のアッカーソン夫妻がいらっしゃいました」

聞き覚えのある名前に、アルバートの心臓がどくりと跳ねた。

「通してくれ」

アルバートはグレンの背後に立っているため、グレンは彼の変化に気付かず、鷹揚にそう言った。

やがて応接間に入ってきたのは、忘れようもない、アルバートを奴隷へと貶めた元親友のジャスティンと、かつてはアルバートの婚約者だったリタだった。

「ようこそ、アッカーソン夫妻」

グレンが歓迎の言葉を述べる。ジャスティンもリタも、一瞬グレンの顔を見て嫌悪感を浮かべたが、すぐにそれを笑顔で覆い隠した。

「お初にお目にかかります、私は——っ！」

挨拶をしようとしたジャスティンだったが、グレンの背後に控えている人物を見て顔色を変えた。

夫の変調に気付いたリタだったが、すぐに彼女もアルバートの存在に気づき、驚愕に目を見開いた。

「お前が何故ここに……!?!」

唇を戦慄かせながらジャスティンが言う。

「アルバート、あなた今までどこにいたの!?! 皆心配したのよ?」

と、リタは口を手で覆う。

アルバートは蒼白な顔でジャスティンを睨みつけていた。

アルバート自身は彼を裏切ったジャスティンの名前をグレンに教えたことはない。口にしたくもなかった。それが仇になった形ではあるが、アッカーソン夫妻の態度で事態を察したグレンは素知らぬ顔でジャスティンに問いかけた。

「うちの家令が何か?」

途端にそれまでアルバートを凝視していたジャスティンは弾かれ

たようにグレンの顔を見た。

「家令……この男が……!？」

ジャスティンは顔をゆがめた。

家令といえ、屋敷の使用人で一番地位が高い。さらに領主の家令となれば、領地経営や出納の管理など、任される仕事や権限も多い。使用人という身分ではあれども、こなす仕事はそんなところの商人よりもはるかに大規模だ。そうそうなれるものではない。

「嘘だ! こいつは……卑しい奴隷になったはずだ! 領主の家令だ!？」

「ねえ、どうして急になくなったのよ、アルバート。ねえ!」

アッカーソン夫妻の声が高くなる。

グレンもベンジーも眉をしかめた。修羅場ですね、とベンジーがグレンにしか聞こえぬような声量で呟く。

よしんばこの三人が単なる旧知の仲だったにしても、取引相手を前にしてこの言動は失礼すぎる。あまりにも浅慮で見苦しい。ましてや彼らの間にあるものを考えれば。

「――失礼します」

硬い声音で早口で言うと、アルバートは返事も待たずに応接室を出ていった。

「待つてよアルバート!」

リタもそれに続いて出ていった。

後に残されたのはポーカーフェイスを貫くグレンと、やや不機嫌
そうなベンジー、そして憤怒の表情を浮かべたジャステインだった。

B面 説得と交渉（前書き）

※いまさらですが説明

A面Ⅱ奴隷達から見たグレゴリー邸とかその他諸々。奴隷中心。
結果。

B面Ⅱグレンから見たグレゴリー邸とかその他諸々。グレン中心。
原因。

今回はA面の続きです。

B面 説得と交渉

アルバートとリタが退室した後、拳を震わせるジャスティンを見て阿修羅のようだとグレンは胸中で一人ごちた。あるいは金髪オルバックの仁王像かもしれない。ジャスティンの方が細面だが。

なまじ美形だけに、憤怒の表情で顔をゆがめているジャスティンはグールのような邪悪さと迫力があつた。エルフにはありふれた水色の瞳は、今はぎらぎらと光っているように見える。

とはいえ、グレンもそれに怯えるほど子供ではない。これからどのように話を持っていくか脳内で計算を巡らせていた。

グレンが出ていったアルバートのことが気がかりじゃないと言えは嘘になるが、この屋敷の中でアルバートが問題を起すとは思えなかった。彼も大人である。

また、商談が始まる前に退室したアルバートの判断は、あながち間違いではない。あえて言うならグレンの返答を待たずに退室したところがまずかったかもしれないが、些細なことだ。

それよりも浅からぬ因縁のあるジャスティンと再び邂逅したことにより、アルバートが何らかの攻撃的なアクションを起してしまう方が問題だ。その場合はグレン側の手落ちであり、弱みになりうる。となれば、恐慌に陥った挙句失言をするより前にその場を可及的速やかに去った方がいい。幸いにして彼は従者である。理由などいくらでも後付けできるし、最悪の場合でもグレンさえいれば問題ない。

アッカーソン夫人が追いかけていったのは予想外ではあったが、アルバートの瑕疵など今しがたのアッカーソン夫妻の行動に比べれば実に些細で問題にならないものである。

アルバート達の出でいった扉を睨んでいたジャスティンであった

が、グレンが咳払いをするとはっと我に返った。それまでのどす黒い感情を消し、恥じたように手を左胸に当てた。謝罪の時の仕草である。真行草で言うところの行。真の謝罪はよっぽどのことがなければ使わないので、適切な選択と言えるだろう。

「大変申し訳ありません、領主様。取り乱してしまいました」

心底申し訳なさそうな声音でジャスティンが言う。未だに興奮が冷めないのか、顔は赤味を帯びたままだ。

「……………とりあえず座れ」

グレンが簡潔に言うのと、ジャスティンは大人しくそれに従った。

商談の始まりである。

まず口火を切ったのはジャスティンだった。

「先ほどは大変お見苦しいところを見せてしまい、申し訳ありませんでした。まさかあの男がここにいるとは思いませんでしたので」

と神妙な顔で謝ったジャスティンであったが、次の瞬間には厳しい顔でグレンと目を合わせた。

「ですが、無礼を承知で質問させていただきます。領主様はあの男の過去の悪行をご存じですか？」

真剣な声音に、グレンはくいと眉を上げた。ベンジーは失礼にならない程度にジャスティンを見て静かに観察していた。

「と、言うത്？」

グレンが水を向けると、ジャスティンはぐっと拳を握りしめ、身を乗り出した。

「私はあの男と同郷でした。あの男は以前に大罪を犯して裁かれ奴刑に処せられています。プロディティオという町に行けば、その証拠が揃うはずです」

ジャスティンは力強く断言した。

奴刑というのは刑罰の一種だ。死罪よりは軽いが、禁固より重い。戸籍を抹消された上で奴隷にされる懲罰である。奴隷身分から解放され戸籍を再取得できるケースはまずないので、実質終身刑のようなものだ。

グレンは軽く腕を組むと、人差し指でトントンと自身の腕を叩いた。

「しかし君の細君はまるで彼が今まで行方不明だったように言っていたと思うが？」

リタはアルバートに対して『今までどこに行っていたのよ』『皆心配した』と言っていた。罪を犯して奴刑に処されたのならば、そんな質問をすること自体がおかしい。

するとジャスティンは沈痛な面持ちになり、僅かにうつむいた。

「……ええ、おっしゃる通りです。妻にはアルバートが奴刑になっ

たことを知らせていません。彼女は以前、あの男の婚約者でした。事情があって彼女は郷里に留まり、あの男と私はプロディティオという町で働いていました。何も知らずに婚約者を信じていた彼女に、あの男が大罪を犯して奴刑に処されたということを告げるのはあまりにも残酷で……。妻にはあの男は自身の罪が発覚したために行方をくらましたと説明しています」

「……………そうか」

グレンは思案するように呟く。ちらりと隣りに座るベンジーに視線を送る。ベンジーは眉根を寄せたまま少しだけ首を横に振った。

「領主様はあの男が罪人だと承知の上で家令にされているのですか？」

言外に騙されているのではないかとジャスティンが言う。

奴隷は戸籍を抹消されているので、どんな名前を名乗るのも自由である。そのため、かつて悪名をとどろかせた罪人でも違う名前を騙って雇い主を欺く場合がある。奴隷の名前がすなわち本名とは限らないのである。だからこそジャスティン達も最近名前が知れてきた家令がアルバート本人だと気付かなかったのだろうが。

何も知らない人が見れば、ジャスティンは実に誠実で真摯な態度に見えた。嘘をついているようには到底思えない。

「前は役人をしていたが、友人に騙されて奴隷になったと聞いている。真面目で勤勉な仕事ぶりで信頼もしているし、とても法を犯すような男とは思えんが」

「そうです。普段は真面目で熱心に働き、信用を得るのが奴のやり口です。以前に奴が罪を犯した時も、周囲の評判は領主様と同じも

のでした。私も幼馴染でありながら、あの男の本性を見抜けなかった」

ジャスティンは悔しげに顔をゆがめた。握りしめた拳を振るわせる。言葉にも表情にも、何一つ違和感を抱かせるものはない。

「領主様は、あの男に冷徹な面があると思われたことはありませんか？ 自身と対立する相手に容赦ない面があるとは思われませんか？」

「……………そういう面は確かにあるな」

グレンは顎を撫でた。

アルバートは時として厳格が行き過ぎる時がある。もう少し柔軟性を持てとは日ごろから言っているが、元来の性格とはなかなか変わらないものである。

「そうでしょう。あの男は自身の敵と見なした相手には容赦なく攻撃を仕掛ける男です。今は大人しくしていても、時機が来たら以前と同じように周囲の人間を全て裏切ります」

グレンの同意に勢いを得てジャスティンが言う。

グレンは思案するように唸った。

「といっても、どういった罪を犯したのかによって問題は変わってくる」

「……………それもそうですね。身内の恥を晒すようですが、奴が犯した罪は自身の地位を使つての横領と贈収賄です。僅か数年で、一年分の町の予算以上の金額をあつ男は違法に得ていました。口封じのため殺人も。家令だというのなら、あの男が裏で何もしないわけではない！ あんな一族の恥さらしがこれ以上罪を重ねるのは私も耐え

られない！　どうか、あの男を一刻も早く免職なさってください！」

ジャスティンは立ち上がると、身ぶり手ぶりを加えてグレンに語りかける。

「しかしそんなことを急に言われても判断が難しい。証拠もないし、彼はよくやってくれている」

「証拠なら！　プロディティオの役場に照会してみてください。アルバート・マクレーンという名前を言えば、奴がどんな所業をしたか皆が教えてくれるでしょう。裁判記録も残っています。523年6月です。私も裁判は傍聴していました。少し調べたら私の言うことが真実だと領主様にも必ず分かっていただけです。そもそもあの男が今のように奴隷の身分を免れているのだって、裏で何をしてきたか……！」

憎々しげに言い放つジャスティンを見て、グレンは考え込むように目を閉じた。

「あなたもおかしいと思いませんか？　役人だった男がいくら友人に騙されたとはいえ、奴隷になるだなんて」

ジャスティンは今度はベンジーに話を振った。ベンジーは一瞬伺うようにグレンを見たが、彼が目を閉じているためにアイコンタクトは不成立となった。

「まあ、そうですね。奴刑でなければ奴隷申請が必要になりますし」「おっしゃる通りです。真つ当な役人に奴隷申請が出て、同僚も家族も誰一人異議申し立てをしないと思われませんか？」

「思いませんね」

ベンジーはあっさりと肯定する。

社会的身分のある者の奴隷申請というのは本来通りにくいのだ。

一人でも知人が異議申し立てをすれば棄却されてしまう。

まして役人であるなら同僚が一人も気付かないというのは考えられない。奴隷申請は役所の戸籍管理と切っても切り離せないため、奴隷申請の名前リストは役所の多くの人間が目にする。

「そう、それが普通です。無実なら必ず周囲の人間が奴隷申請に異議申し立てをするでしょう。妻や故郷の仲間には私が説明しましたが、そうでなければ行方不明になった時点で騒がれてもおかしくないし、そう簡単に奴隷になるはずがない。なら何故そうなったのか。あの男の言う奴隷になった理由が嘘八百だからです」

ゆっくりと力強くジャスティンが断言する。

「あの男が領主様のところにこれ以上置いておくのは百害あって一利なしです。どうか早急にご判断を」

グレンはようやく目を開いた。

そしてその脂肪だらけの体を震わせるように大きな声で――笑った。

「大した役者じゃないか」

「では――」

ジャスティンの表情が明るくなった。
が、

「どうやらアルバートを嵌めて奴隷商に売り渡した人物というのは

君に間違いないようだな」

というグレンの言葉に表情を凍らせた。

グレンはくつくつと笑う。

「私は基本的に、自分の能力を信じていない。所詮私は凡人だ。その私が仕事の右腕となる家令を雇うのに、なんの調査もしてないと思っただか？」

ジャスティンはぐつと言葉に詰まった。

グレンは凡人である。天才には遠く及ばない。前世の知識という他にはない物をもっているが、一人で運用していくには到底技量が足りない。コロンブスの卵を量産することはできても、それを運用していく応用力も実行力も足りないのである。

ならばその助けとなる部下がいる。その中でも一番重要となるのは家令だ。その家令を直感で選ぶほど、グレンは自分に人を見る目があるとは思っていなかった。

アルバートが正式な家令となるまで一年あったのだ。その間にグレンが何もしなかったわけがない。

「アルバートを買った後に、彼の言ったことの裏を取らせてある。プロデューサーにも人を遣った」

グレンの言葉にジャスティンの頬が僅かに引きつった。

ジャスティンはグレンを領主としての腕はよいが、見目麗しい奴隷を収集する変人であると聞いていた。しかも奴隷を甘やかしている。ならばアルバートのことも大して調べもせずに見ただけで気に入って家令にしたのだと思っていたのだ。

「人手がない時期で、あまり人員が割けなくてな。大したことは調べられなかったが、役所の書類も裁判記録も読んだ」

「でしたら――」

「しかしだ」

何か言おうとしたジャスティンを遮ると、グレンは口角を上げた。

「君も傍聴したという裁判は、被告人欠席で全日程を終了しているようだが？」

グレンが告げた言葉に、ジャスティンは疑問符を浮かべた。

公開されている裁判所の記録というのは、基本的に事件の内容や証言や証拠、判決とその日時などしか記されていない。被告人の証言というのは有罪だった場合は載らないことが多い。情報開示という概念が薄いからというわけではない。それだけ分かっていれば十分事足りるからでもある。再審などというものは前例がないためだ。詳細な文書を残す必要がない。

つまり、グレンが裁判記録を読んだところで被告人が欠席か否かは判断できないのだが。

「裁判所の記録をどうやって書き換えたかは知らないが、大した仕込みだ。しかし君はやりすぎた。アルバートが行方不明になった後、彼を悪人に仕立て上げただけで済ませておけばよかったのに、裁判まで起すのはな」

グレンの意図を探ろうと、ジャスティンは口をつぐんだままだ。それに構わずグレンは続ける。気分で言うなら犯人を崖まで追い詰めた名探偵である。

「それに奴刑というのも失敗だったな。万が一アルバートが見つかった時のための保険だったんだろうが、スキエンティア学院を出た優秀な役人が奴刑に処されたのに誰の記憶にも残らないというのは不自然すぎる。下手に細君に情報が流れてたら厄介事になると思ったのか？ 役所の誰に聞いても彼は行方不明になったと言っていたよ」

当時のグレゴリー邸は人手不足だった。ゆえに、アルバートについての調査期間は実質一週間。それでもグレンが事前に出した指示のおかげで何とか必要な情報は得ていた。

「役所で戸籍を照会しても、彼の戸籍は残っていた。その時彼は奴隷の首輪をつけていたのにも関わらず、だ」

グレンが調査指示を出したのは三つ。アルバートの戸籍と奴隷申請の記録、そしてアルバートの評判だった。

裁判記録は調査に行った部下がアルバートの横領云々を聞いて念のため裁判所を訪ねた所、何故か裁判記録が存在したために写しを貰ってきたものだ。

そこまで来てジャスティンもグレンの言っている意味が分かったらしい。顔から血の気が引いていく。

被告人欠席の裁判が行われたのはアルバート失踪から二週間ほど経ってからだ。

そしてグレンの部下がプロディティオに調査に赴いたのは、アルバート失踪から一カ月経ってから。

そして、

「幸運にも私がアルバートを奴隷商のところで買ったのは、彼が奴隷になって一週間目だね」

それまで黙っていたベンジーはへえ、と感心したように呟く。

「なるほど。つまりアッカーソンさんが裁判を傍聴した頃にはアルバート君はこの屋敷に来ていた、と。不思議ですね。アッカーソンさんは誰の裁判を傍聴していたんでしょうね？」

ジャスティンは蒼白な顔でソファに座りこんだ。

グレンは続ける。

「もし君が言うことが本当なら、裁判後も戸籍が残っていたのはおかしい。正規の手段を経たなら、アルバートの戸籍は抹消されているはずだからな。被告欠席の裁判というのもこの国の法律からしてもありえない話だ。誰を身代わりに立てたのか……」

もしグレンがアルバートを購入するのが数週間遅れていれば、アルバートの言葉を疑ったかもしれない。しかし、被告人がいない裁判に抹消されていない戸籍、奴隷申請なし、そして失踪した役人。

アルバートがその失踪した役人を騙ったと考えるのも難しい。名前は騙れようとも、種族と頭脳は容易には誤魔化せない。それに裁判記録と戸籍、そして周囲の人間の評判の不自然なまでの不一致をアルバートの証言と合わせれば、彼が何らかの方法で嵌められたと判断を下すのは妥当である。

「君が言ったことが事実なら、奴刑に処された時の裁判の被告がアルバートであるはずがない。彼はこの屋敷にいたのだから法廷にはいけない。よって、プロデューサーで奴刑に処されたのも別のアル

バートという男のはずだ。だが君はその裁判を傍聴したというのにうちのアルバートを見て奴隷になったはずと言い、彼が罪を犯して裁判で奴刑にされたと言った。そんなことを言えるのは、彼を陥れるためにあちこちに手を回した張本人ぐらいなものだろう？」

グレンは冷笑する。怒りもあつてか、恐ろしい顔つきになっていた。

一見誠実そうな見かけではあるが、とんだ狸である。親友を売り飛ばして奴隷にした挙句、再会した後も彼の地位を剥奪しようとしている。アカデミー賞も狙えるほどの熱演でだ。彼の妻がアルバートの元婚約者だというのならば、この目の前の男はアルバートから地位も名誉も恋人も奪ったということになる。水清ければ魚棲まずなどと言うが、それにしても生真面目で勤勉な仕事ぶりのアルバートがそこまで貶められる理由が、グレンには分からなかった。

「それは……何かの間違いです」

懇願するようにジャステインが言う。

「どうだろうな」

動揺を隠せないジャステインに、グレンは冷淡に言った。

「よしんばその調査をしていなくとも、私は君が言うことを信用しなかっただろう」

「私よりあの男の方が信用できるということですか」

間髪入れずにジャステインが言った。深い確執を思わせる暗い声だった。

グレンは首を振る。

「もし仮に君が言うことが本当だった場合、君は自分の行動の矛盾に気付かないのか？」

説得方法はまずまずだったとグレンは思う。

具体的な地名や日付を出し、ジャスティンから照会を求めることで真実味を持たせた。実際に彼の言うことを信用して調べた場合、裁判記録を見ればアルバートが奴刑に処されたことは分かるし、数々の罪状も明らかになる。抹消されているはずの戸籍を照会する必要はないのでアルバートの戸籍が残っていても大丈夫だと踏んでいたのだろう。あるいはそこまで手が回せなかったか。

さらにアルバートの持つマイナス要素や奴隷となった経緯のおかしい点をこちら側に肯定させることや、端々でアルバートを悪だと断言すること。それによってこちらのアルバートに対する不信感を植え付けようとした。

当初の失言も、アルバートが自分たちの信頼を裏切った犯罪者だからと言われればまあ納得できないこともない。

しかしその場合、ジャスティンの行動には決定的におかしな点があった。

ジャスティンは戸惑ったようにグレンを見ている。

と、再びベンジーが口を開いた。

「もし僕がアッカーソンさんの状況なら、そんな極悪な男を妻が追いかけてどこかへ行ってしまったなら、相手に断りを入れてでも追いかけるでしょうね。元婚約者なら、情に流されて騙されるかもしれませんし」

ベンジーの言葉に、ジャスティンはきつく歯を食いしばった。

ジャスティンが言うことが真実なら、アルバートは口封じのためなら殺人さえ厭わない男ということになる。そんな男が領主の家令という地位を得た状況でかつての罪状を知っている知人と出くわして、口封じに動かないという保証があるだろうか。

「君は元友人というだけあって、アルバートの性格は熟知しているらしい。彼が嘘はつかないことや、元婚約者に危害を加えないと踏んでの咄嗟にさっきまでのあのお喋りをしたんだろう？ 大したものだ」

「そんなつもりでは――！」

「なんにせよ」

グレンはジャスティンの言葉を遮る。

「商談相手に警鐘を鳴らすことは、悪いことじゃない。しかし君の細君はサピエーンズ商店では欠かせない人材だろう。彼女がいなくなればサピエーンズ商店の収益は確実に下がる。その点でも君の売人としての判断力に疑問を持つし、細君の身の危険を全く気にしないような人間性が信用ならない」

ましてエルフは生涯の伴侶を大事にするとベンジーから聞いている。ジャスティンの大事にするというのがその程度というのなら、彼の人格も推して知るべしである。

「まあ、私は私について来てくれる部下は信用することになっているから、それが大きいかもしれないがね。皆大事な部下だ」

部下を信用しない上司ほど面倒くさい物はない、というのがグレンの持論である。時として疑うこと、矯正すること、チェックする

ことは重要だ。だが根っこのところの人間性を信じてもらえないと、精神が擦り切れる。

良い営業マンを作るには、その人間の人格を否定して壊して再構築するものだ、とかつて前世での上司は言った。既に形づくられているものは邪魔だというのだ。しかし、いいところも駄目なところも含めての人間性である。その程度で心が折れるならその程度の人材だと言われてしまえばおしまいだが、グレンはなるべくなら相手を受け入れていきたいと思っていた。勿論まずいところは矯正する。しかし、根っこは皆善人のはずなのだ。良い人材は財産である。だから使い捨てるようなことはしたくない。

ごくごく一部の例外を除いて。

グレンはジャステインの目を見据えた。

「私はあまり人に好かれない性質だが、貴族や商売相手への影響力は持っているよ」

そしてグレンはぐにやりと口をゆがめて凶悪な笑顔を作った。

「――さて、それらを踏まえた上で商談を始めようじゃないか」

覚悟を決めてもらおう、とグレンは胸中で呟いた。

サピエーンズ商店がグレン達に事実上乗っ取られたのは、それからわずか数ヵ月後のことだった。

これにより、グレゴリー領に限らず、亜人との広いつながりを得ることができるようになったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6678u/>

彼は優しいご主人様

2012年1月15日01時24分発行